

Girls und Steins;Gate  
～世界像のインデター  
ミニズム～

Narrenfreiheit

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

黒森峰女学園二年、逸見エリカは、学園艦が東京に寄港する夏休みに秋葉原を訪れていた。

彼女の趣味であるネットサーフィンが高じてオタク趣味を持った彼女が興味を持ったからである。

そんな彼女は、秋葉原観光中にとある小さな店とその店の二階にある妙にやかましい部屋を見つけた。

その部屋の名前は「未来ガジェット研究所」

今、交わるはずのない二つの運命が収束していく……。

※このSSは某所からの転載でもありません。

# 目次

第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
95	78	62	47	27	1

## 第1話

「ついに着いたわよ……秋葉原！」

一点の曇りもない青い夏の空の日差し眩しい朝頃、黒森峰女学園二年、逸見エリカは多くの人々が往来する秋葉原駅の前で静かにと両手を握りしめ言った。

ヒラヒラとしたフリルのついた私服を着た彼女は、秋葉原の独特な空気に妙に馴染んでいる。

しかし、その服に似合わない大きなカバンが、ある種いびつな彩りとなり彼女の存在を際立たせていた。

「ずっと待ち望んでいた夏休みにおける学園艦の東京寄港……隊長達にも内緒でやって来たんだから、今日は思う存分楽しむわよ！」

エリカはそう言いながら秋葉原駅前から歩き出す。

彼女の楽しそうな様子は傍から見ても手に取るように分かるようだった。

「さーて、最初はどこから買いた物でしょうか？」

エリカは微笑みながら秋葉原の大通りを見回し歩き始める。

その表情は、普段つんけんとした態度ばかりで、学校でも友人や先輩にも固い表情ば

かり見せる彼女からは想像できないような、楽しそうな表情だった。

エリカがここまで秋葉原を楽しむように歩いているのは理由があった。

彼女は趣味としてネットサーフィンをすることが多いのだが、その中でも、インターネットにある匿名掲示板の中でも最大級の掲示板、@ちゃんねるを見るのが何より好きだった。

@ちゃんねるはインターネットの中でも様々な層が集まる匿名掲示板であるが、その中でも特に、いわゆるオタクと呼ばれる人種が在中していることが多かった。

エリカはネットサーフィンで@ちゃんねるを見るようになってからというもの、そういった人々と多く交流することになり、結果、彼女も幾分か毒され、オタク趣味を持つようになったのであった。

そんな彼女が、オタクの聖地と呼ばれる秋葉原に興味を持つようになったのは、自然な流れと言えよう。

「まずはアニメイトでしょ、そのあとはとらのあな、メロンブックス、まんだらけにトレーダー……行くところは沢山あるわね！」

エリカは指を折りながら言う。そのエリカの姿は、フリルの多い可愛らしい服装も相まって、一際輝いて見える。

「あ、せっかくだしメイド喫茶も寄ってみたいわね……あと、裏路地とかにあるマニアッ

クな店とかも。大通りにある店ばっかじゃもったいないですね。ああ、とにかく行ってみたい場所がいっぱいあるわ!」

エリカは瞳を輝かせながら言うと、街の雑踏の中に入ろうとする。

「と、その前に」

エリカは一旦足を止めた。

「あれ、見とかないとね」

エリカは目の前にあるビル、世界のラジオ会館の屋上を見る。そこには、屋上に突き刺さった謎の人工物があつた。

「あれがラジオ館に落ちたっていう人工衛星ね……とんでもないこともあつたものだわ」

エリカは見上げながら言う。エリカが秋葉原に来る前に、ラジオ会館に人工衛星が落ちたというニュースがあり、動画が出回っていた。それを、エリカは見ているのである。

「……ま、さんざんテレビで見たし生で見てもそこまで感動はないわね。それより散策っ」と

こうして、エリカは秋葉原での散策を始めた。

エリカは午前中を大通りにある店を回ることに費やした。

秋葉原にある店は普段彼女がいけるような店とは段違いに大きく、彼女の好奇心や購買意欲をくすぐった。

エリカは立ち寄った店で漫画や同人誌、同人ゲームなどを買い込む。買ったものは彼女がそのために持ってきていた大きなカバンに入れた。

ある程度大通りでの買い物が終わらせると、エリカは秋葉原にあるカレー店で昼食を済ませる。

カレーは彼女の尊敬する先輩である戦車道の隊長、西住まほの好物であり、チエーン店でもあるためその店の味を覚え今度まほを秋葉原以外の場所ですれ違ったとき、エスコートしようということも考えてその店に寄ったのであった。

狭い店内において可愛らしい服装でカレーを食べるエリカの姿はある種異様ではあったが、秋葉原はそういった客も多いため、彼女の姿は特に周囲の目を引くこともなかった。

そうして昼食を終えた後に、今度は裏路地の店の探索で。

「すごい……一本道をずらしただけでここまで雰囲気が違うのね……」

大通りを少し離れただけで醸し出されるアンダーグラウンドな雰囲気に、エリカは痺れた。

「人通りは少ないけど色々な店があるのねえ。私みたいなのに向けた店はさすがにないかしら……」

エリカはそう言いながら裏路地の道を歩き、並んでいる建物に目をやる。



売っているものはどれもマニアックなものだったり、ちよつと怪しいものだったり、ある意味それはエリカの心をくすぐった。

普段なら胡散臭いと一蹴しているところだが、今のエリカはその場の空気感に影響され、興味を湧かせているのであった。

「さすがにココらへんは……普通のビルとかかしら？」

エリカはいつしか裏路地の奥にまで迷い込んでいた。エリカの目の前にあるのは、一階が店になっているようなビルだった。

その店はどうやら今の時代珍しくなったブラウン管テレビを売っているらしく、その店に並ぶ数多くのテレビ画面はエリカの目を引いた。

さらに、エリカの足を止めさせたのはそれだけが理由ではなかった。

その店先にいる少女が、ある意味その店には不釣り合いだったからだ。

青いジャージと短パンのその少女は、店先でどうやら自転車をいじっているようだった。ブラウン管というもののイメージからはかけ離れたような少女だ。

その姿を、エリカはなんとなく見ていた。

「ん？」

と、そこでその少女がエリカに気づいた。

「あ、お客さん？」

「え？ 私？ い、いえ。違います！ ただちよつと気になっただけで」

「うんうん確かに気になるよね、こんなにいっぱいテレビあるとき。君、観光で来たの？  
だったら見ていけば？ あんまり面白いものじゃないかもしれないけど」

「は、はあ……」

どうやら店員らしいその少女に言われ、店の中を外から何うエリカ。

店の中は暗く、よく見えないがやはり沢山のテレビがあることだけは分かった。

そんなときだった。

「……それでクリステイーナよお、タイムマシン開発の経過はどうなのだあ？」

「ティーナって言うなと言つとろうが！ ……まあまあって感じね。現在の進捗具合で  
言う……」

ふと、窓の開いた店の上の階の部屋から、妙な会話が聞こえてきたのだ。

「……タイムマシン？」

エリカは何かと思う。アニメかゲームの話だろうか。しかし開発と言った。それが  
何故かエリカには気になった。

さらにクリステイーナとは外人の名前だろうか？ しかし、話している相手はどう考  
えても日本人のようだったが、とエリカは思う。

「あ……ははは、まあ気にしないで」

エリカの様子に店員らしい少女は苦笑いする。

「岡部ー！ あんたねー！」

「まっ、待てクリステイナー！」

すると、上の階がなんだか騒がしくなり、そして少しすると階段を一人の男が降りてきた。

その男は、白衣を身にまとうという町中では奇抜寄りな格好をしており、無精髭を少しばかり生やしていた。

「まったくクリステイナーの奴……プリンぐらいであそこまで怒りおつて……ん？」

「あ」

と、そこでエリカはその男と目があつた。

「……………」

「……………」

わずかな間見つめ合う二人。男はエリカと店員の少女を見比べたかと思うと、突如携帯電話を取り出し突然会話し始めた。

「もしもし、俺だ。緊急事態だ。ミスターブラウンの家に謎のエージェントがやって来ている。ああ……何?! これも機関からの手先だと言うのか?! おのれ……やつらは俺達の地盤を脅かしに来たと言うのか！」

「えっ、ちよつ、何っ!？」

突然誰かと妙な会話をし始めた男に対し、困惑することしかできないエリカ。

男はそんなエリカをチラチラ見ながら電話を続けている。

「ちよつと岡部！ 財布忘れてるわよ！」

と、そこで階段から別の人間が降りてきた。ジャケットを着崩した長髪の女だ。

「ん……？」

その女は、エリカとその男の状況を見て、一瞬固まると「はあ……」と軽くため息をついて男から携帯を奪い取った。

「あつ、何をするクリスティーナ！」

「だからティーナって呼ぶな！ ……ごめんなさいね突然。ほら、これ見てみてください  
い」

「え？ あ……」

女はエリカに男が喋っていた携帯を見せる。すると、その携帯電話はただの待受画面であり、通話状態ではなかった。

「この人、ちよつと変な人だから気にしないで」

「え、ええ……」

突然携帯電話に向かって独り言を喋りだすのは確かに変な人間なのだろうと、エリカ

は思った。

だがそんな男相手に平然としている彼女も彼女ですごいな、ともエリカは思った。

「それで、あんたは何で突然見ず知らずの人間の前でそんなことしてんのよ」

「いいか助手よ、この少女はミスターブラウンの店を覗いていたのだ。この少女がだ。普段は殆ど客も無く来るとしても電気オタクか老人ぐらいしか訪れないミスターブラウンの店にだ！」

「……なるほど、確かにそれは珍しいわね」

二人はまじまじとエリカを見る。

「えっと……」

その視線が妙に恥ずかしく、二人から目をそらすエリカ。そらした先には店員の少女がおり、彼女に助け舟を求める。

すると、その視線からエリカのメッセージを悟ったのか、店員の少女は話し始めた。

「ああこのお客さんは私が呼び止めたんだよ。なんか店に興味持ったらしかったからさ。たまにはバイトらしいことをしようと思って」

どうやら少女はバイトらしい。エリカはそれに一人納得した。

一方、そのバイトの少女の説明で目の前の男達も納得したようで、「なるほど……」と首をうんうんと振る。

「なるほどそれなら話は早い。どうやら機関からのエージェントではないようだな」  
「き、機関……?」

「だから、目の前の人が混乱するからそういうのはやめろって言うてるでしょうが!」  
「どうやらそうとうに変な人らしい、とエリカは目の前の男を見てそう思った。

「これは早めにここから離れたほうがいいかもしれないも思った。なので、エリカは一言別れを告げその場から立ち去ろうと考えた。

「……それじゃあよく分からないけど頑張ってくださいね、えつと……岡部さん?」

「確か女のほうが男のほうをそう呼んでいたため、エリカはその名前を呼んでその場から逃げようとした。

「違あう!」

「だが、その名前に対し目の前の男は叫んだ。

「えっ!?!」

「我が名は、鳳凰院凶真! 世界を混沌へと導く狂気のマッドサイエンティストだ!」  
「あまりにも痛々しいその名乗り。

「普通の人間ならさらに顔を歪めてその場を立ち去るだろう。

「しかし、エリカは違った。

「鳳凰院凶真って……あのクソコテの!?!」

エリカはその名に反応した。反応してしまったのだ。

「え?」

「え?」

「え?」

エリカが大声でその男の名を知っていたことに、三人がポカンとする。その瞬間、エリカは思った。

—— やつてしまった……! と。

「……貴様、我が名を知っているだ?! やはり機関からのエージェン——」

「だからそういうのはいいから。……えつとあなた、今こいつの自称を知ったわよね?

しかもクソコテって。ていうことはつまり……」

目の前の女が言葉を濁しながらもエリカに聞く。

その段階ならまだ挽回のチャンスはあっただろう。だが、エリカは——

「ちつ、違うわよ!?! 私別に@ちゃんねるなんて見てないし! そのクソコテと何回もレスポンチバトルとかしてないし!」

墓穴を掘ってしまった。

クソコテとは、匿名掲示板においては目立つ固定ハンドルネームのことをコテハンと

言い、そのとりわけ目立つコテハンのことを指す言葉である。そして、レスポンチバトルというのは匿名掲示板への書き込みをすることをレスと言い、その応酬で喧嘩することを言う。

どちらもインターネットの匿名掲示板で使われる用語だ。

それをエリカは堂々と外で使ってしまった。

「……………」

「…………お前、ねらーか？」

それは自分が、@ちゃんねるを見ているという告白と同義であった。

「…………そ、そうよ！ 私@ちゃんねるで時折あなたに噛み付いてた疾風戦車123よ

！ 何か文句ある！ このクソコテ鳳凰院凶真！」

「クソコつ…………!?!」

エリカはもうやけっぱちだった。顔を真っ赤にし、目にはうっすらと涙を浮かべ、初対面の人間——ネット上では初対面ではないのだが——相手にタメ口でいつもの学校での姿で接したのだ。

「…………君、女の子を泣かせるのはどうかと思うよー？」

「最低ね、岡部」

そんな通称鳳凰院凶真に、冷たい視線が刺さる。



「俺か!? 俺が悪いのか!?!」

その視線に、さすがの鳳凰院凶真もたじたじになったらしく、先程までの奇行も鳴りを潜め、慌てている。

「その……動じることはないフリフリの少女よ! そのクリスティーナなどバレバレであるのに未だに自分がねらーだということを隠せていると思っっている悲しい奴なのだからな!」

「はあ!?! だ、誰がねらーよ!?!」

「ぬるぽ」

「がっ」

それに、エリカとクリスティーナと呼ばれた女が反応した。

「……っ!」

条件反射的に反応したエリカと通称クリスティーナは、恥ずかしそうな顔をする。

「もうっ、人前で何言わせるのよっ!」

「黙れねらーよ、ねらーならねらー同士なんかするのだ!」

「それはあんたもだろーが!」

いつしかエリカそっちのけで喧嘩を始める二人。

その光景にエリカは未だ顔を赤くしつつも啞然となった。

「ははは……なんかごめんね」

と、そこに先程のバイトの少女が話しかけてくる。

「い、いえ……大丈夫です……こっちこそなんかお仕事の邪魔しちゃって……」

「ううん、いいのいいの。どうせ暇だし」

そう言つて軽く手を振つてくれるバイトの少女のおおらかな態度に、エリカは幾分か気持ちが悪くなる気がした。

「ほら！ もうこうなったら私のプリンと一緒に彼女の分のプリンも買ってくる！ それでいいわね！」

「だからなぜ俺が自腹でプリンを買いに行かねばならんのだ!？」

「女の子泣かせたんだから当然でしょ!」

「だから俺のせいではないと——」

「いいから行つてくる！ それとも何か？ また正座したいか？」

「っ！ わ、分かった!」

エリカがバイトの少女に慰められているうちに、どうやら何故か鳳凰院凶真がプリンを買つてくるという話になつたらしい。

鳳凰院凶真は急いでその場から走り去り、コンビニへと向かつて行つた。

「ごめんなさい、ただブラウン管工房を訪れただけなのにあなたに恥ずかしい思いをさ

せてしまつて」

「いい、いえ……」

そして、鳳凰院凶真が立ち去つた後に通称クリスティーナが話しかけてきた。

「よかつたら謝罪にだけど、上でプリンを食べていけない？ もちろん嫌なら買ってきたのを渡すだけにするけど……」

エリカの目の前のクリスティーナという女は、エリカに好意を見せてくれているようだった。その好意を無下にするのもよくないと、エリカは思った。

「あ、じゃあせつかくなので……」

なので、エリカはその申し出を受けることにした。

「分かりました、えっと……クリスティーナさん？」

「違うから！ ティーナじゃないから！ 私は紅莉栖、牧瀬紅莉栖です」

「あ、はい。私はエリカ。逸見エリカです」

エリカは、牧瀬紅莉栖から自己紹介され、その流れで彼女もまた自己紹介した。

「おーい、買ってきたぞ」

と、そこへ鳳凰院凶真が走って帰ってくる。

「あ、いいタイミングで戻ってきたわね。ちょうどいいわ岡部。あなたも彼女に自己紹介しなさい」

「ん？ 何がちょうどいいのだ？」

「いいから！ 彼女、逸見エリカさんって言うんですって。私も名乗ったし彼女も名乗ったんだから、あなたも名乗るのが礼儀でしょ」

「むう……分かった。我が名は狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶——」

「そういうのはいいから。本名名乗れ本名を」

「むう……俺は岡部倫太郎だ、よろしく」

「ちなみに私は阿万音鈴羽、よろしくね」

鳳凰院凶真こと岡部倫太郎、そしてバイト少女こと阿万音鈴羽がそれぞれ名乗った。これが、逸見エリカと岡部倫太郎、そして牧瀬紅莉栖の出会いだった。



「というわけで、これが我がラボ、未来ガジェット研究所だ！」

「へえ……」

倫太郎の高らかな声と大げさな手の動きにより、その部屋に案内されたエリカは軽く声を上げた。

ラボと言うには小さな部屋に、乱雑に様々な物が置かれている。

部屋の窓側に置いてあるパソコンの前には太った男が座り、反対側のソファアールのところにはヒラヒラとした帽子を被った少女が座っていた。

その部屋を見てエリカは一言。

「こじんまりしてるわねえ……」

「なっ!?!」

エリカの言葉に一瞬顔を歪める倫太郎だったが、すぐさま余裕のある表情に戻り、エリカに言う。

「ふん、素人には分からないだろうな。このラボがいかに世界を混沌に陥れるか、その恐ろしさが」

「んー? オカリン、その子誰なのさ?」

「あれー? オカリンがまた誰か連れてきたー」

と、そこで太った男とソファアールに座った少女がそれぞれエリカに反応する。

エリカはその二人に軽く頭を下げる。

「どうも、逸見エリカと申します。その、ちよつと色々あってここでプリンを食べていないかって言われて……」

エリカは詳しいことは端折り二人にとりあえずの目的だけ伝えた。泣いたなど認めなくなかったからである。

「ほうほう、何があつたので？」

しかし、太った男はそこに食い下がる。

「岡部がこの子泣かせたのよ」

それに対し、紅莉栖がはつきりと言う。

「オカリン……」

「むう、オカリンそれはひどいのです……」

「なつ、泣かせてなどいない！」

「そつ、そうよ！ 私だって泣いてないから！」

倫太郎とエリカはそれぞれ弁解するように言う。それに対し、二人は疑いの目を倫太郎に向けていたが、倫太郎はそれをあえて無視するように部屋の中央に行き、エリカのほうへと向き直る。

「よ、よし。それでは紹介してやろう。まずは、ラボメンナンバー〇〇二！ 椎名まゆり！」

倫太郎はソファアに座った少女、椎名まゆりに手のひらを向けて言った。

「トウツトウルー！ どうもエリカさん！ まゆしいは、まゆしいなのです」

「とう、とう……？」

その独特の挨拶に困惑するエリカ。だがそんなエリカを置いて、倫太郎は紹介を続け

る。

「そして、ラボメンナンバー〇〇三！ スーパーハカー！ 橋田至！」

「ハッカーだろ常考。どうもー逸見氏。よろしくお」

「よ、よろしく……」

やはり未だ場の空気に慣れていないエリカは、たどたどしい挨拶をする。

——なんだかすごいところに来てしまった。場違いではないだろうか？

エリカはそんなことを考える。

だが、そんなエリカのところに、まゆりがニコニコしながら近寄ってくる。

「……えつと？」

「うーん、エリカちゃんのこの服、可愛いのです。ヒラヒラしてて綺麗で、お人形さんみたいだなーってまゆしいは思うのです」

「お、お人形!? 私が!？」

エリカは驚く。

今までエリカはそんな評価を他人からされたことはなかった。そもそも、他人に自分の私服をあまり見せてこなかったからなのだが。

「べ、別に私はそんな可愛いわけじゃ……」

「ううん、そんなことないのです。顔もすごく綺麗だし、コスプレとかしたらすごく似合

「いそうだなーとまゆしいは感じるのです」

「へ、へえ……」

「あら、照れてるんですか？ 逸見さん？」

まゆりのまつすぐな好意に顔を赤くするエリカ。そのエリカに、紅莉栖が微笑みながら言う。

「てっ、照れてないわよ！」

エリカはつんとそっぽを向いてそれを否定する。その仕草がすでに肯定の意になっているのだが、エリカはそれに気づけない。

「そ、それよりプリンよプリン！ 私、それを食べるためにここによったんだから早く食べさせなさいよね！」

エリカは話題を逸らすように言う。

その様子に、紅莉栖はクスクスと笑いながらも倫太郎からプリンの入ったビニール袋を奪い取る。

「ええそうね、私も食べたかったところだし。一緒に食べましょう？」

「……まあ、別にいいけど」

「だつたらここに座るのです。エリカちゃんが真ん中で、その両脇にまゆしいと紅莉栖ちゃんが座るの！」



「え、ええ」

エリカは言われた通りに二人に挟まれて座る。そして、右隣にまゆり、左隣に紅莉栖が座った。

「ねえねえ、エリカちゃんは何歳なの？」

「え？ その、十七だけど……」

「おお！ まゆしいよりひとつ上なのです！」

「ということは、逸見さんは私よりひとつ下ね。だったらタメ口でいいかしら？」

「……すでにタメ口じゃないの。なら、私もタメ口で。そのほうが私もやりやすいし。それに、呼び捨てでいいわよ。いちいちさん付けというのも柄じゃないわ」

「分かったわ。エリカ。私達のこと呼び捨てでかまわないわよ」

「ええ……えつと、紅莉栖に、まゆり？」

「ええ」

「はいなのです！」

エリカはいつの間にか自然と二人と楽しく会話をすることができるようになった。

それはきつと、まゆりのおかげなのだ。エリカは思った。まゆりが話しやすいように親しみやすく接してくれたおかげだと、そう思った。

そんな三人を見ている倫太郎と至。

「……キマシ……キマシ……」

「ダル。それ以上言うとお助手に殴られるぞ」

「わ、分かっているお！」

三人を見て興奮する至に、倫太郎が言うのであった。

二人がそんな会話をしている間にも、三人はいろいろと楽しく会話を続ける。

「へえ、エリカは熊本の高校に通ってるのね」

「ええまあ。熊本と言えば熊本ね」

「へえーすごいのです。勉強もすごくできそうだねえ」

「まあまああってところよ。一応、物理は結構できる自信はあるわよ。でもまあ、紅莉栖には及ばないでしょうね。だって海外の大学で論文発表してるってさつき言ってたでしょ。凄じじゃないの」

「私はやりたいことをやっているだけよ。そしたら結果がついてきただけ」

「そう言えるだけ凄いわ。私なんて全然結果が出てくれないもの。たまに嫌になっちゃうわ」

和気あいあいと話す三人。一方で、やはり倫太郎と至の二人は黙ってそれを見ていた。

「……ダルよ」

「何、オカリン」

「微妙に疎外感を感じるのは俺だけか」

「禿同。イチヤイチヤ空間すぎて居場所がないと思われ」

三人を見てそんな感想を口にする倫太郎と至。

二人はしばらく話し続ける三人をただ黙って眺めていた。

そうして少し経ったときだった。

「そうだ！ まゆしいにいい考えがあるのです！」

突然、まゆりが両手を合わせながらエリカに言った。

「エリカちゃんが明日もいるなら、明日からのアキバ観光をまゆしい達が手伝ってあげるの！」

「えっ、いいのまゆり？」

突然の提案に紅莉栖が驚いた。もちろん、エリカでもある。

「私が言うのもなんだけど大丈夫？ 私としては願ってもないんだけど」

「いいのいいの！ せっかく仲良くなれたんだし、一緒に楽しくアキバを周りたいたまゆしいは思ったのです」

「ほう、いいのではないか。三人で楽しんでこい」

「何言ってるのオカリン。オカリンも一緒に来るんだよ？」

「えっ」

完全にまゆり、エリカ、紅莉栖の三人で行くものと考えていた倫太郎は、まゆりのその一言に虚を突かれたように声を出す。

「当然でしょー？ だってオカリン、エリカちゃん泣かせたんだよ？ 責任はちゃんととらないとー」

「し、しかしだなまゆり。俺は世界を混沌に落とすというマッドサイエンティストとしての大切な使命が——」

「オカリンー？」

まゆりはソファアールから立ち上がり、倫太郎に詰め寄る。まゆりに詰め寄られしどろもどろになる倫太郎。

そしてじつとまゆりに見つめられた倫太郎は、ついに諦めたような表情をし、突如バツと妙なポーズを取った。

「……フツ、フツハハハハハハ！ いいだろう！ この狂気のマッドサイエンティスト鳳凰院凶真が、そののいたいけな少女にアキバの闇を教えてやろう。感謝するがいい、シルバーファングよ！」

「シ、シルバーファング!? それって私のこと!?!」

突然妙なあだ名で呼ばれ、エリカは困惑する。それに対し、倫太郎は顎を上げエリカ

を見下ろすような形で喋りだす。

「そう、その通りだシルバーファンングよ。その輝く銀髪にオオカミのような鋭い双眸。そんな貴様の真名をこの鳳凰院凶真の魔眼が見抜いたのだ!」

「オオカミでファンングって気取つてるところが岡部よねー」

「うるさい黙れこのクリステイナー」

「だからティーナつてつけるなつて言つとろうが! ま、岡部とまゆりがアキバを案内するのなら、私はいらないわね。頑張つてね二人共」

「む、なぜ貴様は来ないつもりなのだ!」

「私がいなくなるとアレの開発が滞るでしょ? 他にも実験とかしないといけないし」

「むう、確かにそうだが……」

「アレつて?」

紅莉栖が濁すように言った言葉に、当然エリカは引つかかる。

「ふつ、それを貴様に教えるわけがないだろうシルバーファンングよ。これは我がラボの最重要機密。それは世界に大いなる変革をもたらす奇跡の発明であり——」

「あつ、もしかしてタイムマシン? つて奴のこと?」

エリカがその言葉を言った瞬間、倫太郎と紅莉栖がとても驚愕した表情をした。

「なっ!?! なぜ知っている!?! やはり貴様、機関からのエージェント!?!」

「だから違うわよクソコテ。……外に居たときにあなた達の話が聞こえてきたのよ。まあ、どうせタイムマシンっていう名のよくわからない代物何でしょうけどね。この部屋に散らばっているものを見る限り」

エリカは部屋にある様々な物——未来ガジェットを見ながら言う。

そのエリカの態度に、倫太郎と紅莉栖は目を合わせ、無言で頷きあう。

「……え、ええ。まあそんなところよ。あなたももう分かっているだろうけど、この岡部っていう奴は厨二病でいちいち大それたことを言うやつだから」

「ふっ、素人には俺の偉大なる思考は読めまい……」

「はいはい、厨二病乙。……ま、そういうことなら明日お願いしようかしらね。一人じゃ分からないこといっぱいあるし。よろしくね、まゆり。倫太郎。あと泣いてないから」

「エリカはその場の空気に妙な違和感を覚えつつも、とりあえずまゆりの提案を了承し、その日はもう少しラボメンと談笑した後、プリンを食べて宿泊所として予約していたホテルへと帰ったのであった。」

## 第2話

翌日、エリカは再び未来ガジェット研究所に来ていた。そこでまゆり達と待ち合わせをする予定だったからである。

「さて、来たわよー」

エリカは二階に上がり部屋の扉を開ける。すると、そこにはすでに未来ガジェット研究所のメンバーが揃っていた。

「トウツトウルー。おはようなのですエリカちゃん」

「ふっ、おはようシルバーファングよ。冥界へと旅立つ準備はできたか？」

「おはようまゆり。おはよう岡部。はいはい、準備はできてるわよ。今日はよろしくね」  
まゆりには普通の笑顔を、岡部に呆れた笑顔をするエリカ。

そして、部屋を見回しそこにいた紅莉栖と至にも挨拶をする。

「おはよう紅莉栖、おはよう至」

「おはよう、エリカ」

「おはようでござるよ逸見氏ー。相変わらずフリフリとした服がかわいいでござるなあ」

「うっ……朝から気持ち悪いこと言わないでよ……」

至の挨拶に顔を歪めるエリカ。本来なら傷ついてもおかしくない眼差しだったのだが、至はむしろそのエリカの視線に鼻息を荒くし始めた。

「ハアハア、現役JKの冷たい眼差したまらんですなあ。ハアハア」

「うげえ……」

「むっ！ 今のうげえという顔もう一度！」

「それ以上にしなさいこの変態！」

と、そこで紅莉栖が助け舟を出す。エリカはその紅莉栖のフォローにより一息つけ、こっそりと紅莉栖に手でありがとうという意思を伝える。

すると、紅莉栖もどういたしましてとジエスチャーでエリカに返す。

「うんうん、エリカちゃんがさっそくらボに溶け込んでくれてまゆりは嬉しいなあつて。それじゃ、さっそくアキバ探検に出発ー！」

「あ、おい待てまゆり！」

「ちよ、ちよつと!?!」

まゆりは倫太郎とエリカの手を掴み、とても楽しそうに外に出ていった。

その後姿を見て、紅莉栖は微笑む。

「……まゆり、楽しそうね」



「そだねー。あとオカリンも楽しそうにしてるお」

「そうなの？」

「うん。なんとなくだけどねー」

「さて、最初にやって来たのはここ！メイド喫茶のメイクイーンニャンニャンなのですー」

秋葉原でも一際人が集まっているメイド喫茶。メイクイーンニャンニャンの店内。

それを前にして、エリカは感動に震えていた。

「ここが、メイド喫茶……！」

「なんだシルバーファングよ。そんなにメイド喫茶に来たかったのか？」

「えっ!? ベ、別にそういうわけじゃ……ただほら、秋葉原に来たらメイド喫茶に一度は寄ってみたいって思ってたし……」

エリカは正面に座る倫太郎から顔を逸らしつつ、赤面しながら言った。

確かにエリカの言う通り、彼女はメイド喫茶に一度来たいと思っていた。それはその言葉通りでもあるし、彼女の服の趣味からしても来てみたいという気持ちがあったのだ。

「やつほー凶真！来てくれて嬉しいにゃー！」

と、そこに明るい声が飛んでくる。

エリカがその声のほうを向くと、そこには明るい髪色の猫耳をつけたメイドが立っていた。

「えっと、この人は……」

「ふっ、説明しよう。彼女はラボメンナンバー〇〇七！ フェイリス・ニャンニャンだ！」

「よろしくにゃー。凶真、また新しい女の子を引つ掛けているにゃ？ 隅に置けない男にゃー」

「ち、違う！ そういうのではない！」

「フェイリスちゃんはねー凄いんだよ。この秋葉原でもナンバーワンの人気を持つメイドさんなんだから！」

まゆりが説明する。その言葉に、エリカは素直に感心する。

「へえー……そんな凄いメイドさんとも知り合いなのね、倫太郎は」

「まあな。このフェイリスとは前世からの闇の戦いと共に戦った仲なのだよ」

「そうにゃ。フェイリスは凶真と一緒に地獄のヘルフレイム大戦を戦い抜いたのにゃ。あれは、辛く厳しい戦いだっただのにゃ……」

「……もしかしてこの子、倫太郎と同類？」

「ま、そんな感じかなー。フェイリスちゃんは、オカリンとずつごく話が合うんだよー。まゆしいは二人の会話は難しくついていけないけど」

「ふうん……」

エリカは改めてフェイリスを見る。その姿はまさに理想の萌えメイドの具現化とも言うべき姿であり、エリカは少し見惚れてしまった。

その視線に、フェイリスが気づく。

「どうも初めましてにゃ！ えっと……」

「彼女はシルバーファング。孤高の一匹狼だ。噛みつかれないように気をつけろよフェイリス」

「にゃ!? それは怖いにゃ!」

「噛み付いたりしないわよ! それに、私は逸見エリカってちゃんとした名前があるんだから!」

「にゃ! なるほど、エリにゃんもまた影を背負っているのかにゃ! これは侮れないにゃ……!」

「エリにゃんて……」

その独特の呼び方と雰囲気、すっかり飲まれるエリカ。しかし悪い人ではないのだなとも思い、軽く困ったような笑いをする。

「ははは……」

「さ、さっそく注文してにや！ 注文してくれたら、フェイリスが愛を注いであげるにや！」

「ええわかったわ。それじゃあ……」

そうしてエリカは、その日の昼食をメイクイーンニャンニャンでたつぷりフェイリスから愛を注いでもらったのであった。

「そしてお次ははい！ アキバでも有名な神社、柳林神社なのです！」

メイクイーンニャンニャンを出た一行は、今度はまゆりの案内で秋葉原にあるという神社にやって来ていた。

「へえ、電気街つて言われる秋葉原にもこうしたノスタルジックな神社があるのね」

エリカは珍しいものを見るような目で神社を見る。

と、そこでエリカは神社の境内でとある人物を見かけた。それは、巫女装束を身にまとった少女のようだった。

その少女は、境内で何故か模造刀の素振りをしているようだった。

「おオルカ子よ、今日も精が出るな」

「あつ、岡部さん！」

倫太郎がその子の名前を呼ぶと、そのルカ子と呼ばれた少女が嬉しそうに駆け寄ってきた。

その姿にエリカは驚いた。その姿は、超のつくほどの美少女だったからだ。

「すごい、こんな綺麗な子がいるのね……」

「そうだよねー、るかくん綺麗だよねー。まゆしいも嫉妬しちゃうのです」

「ええ、私も妬いちゃうわ……ん？」

と、そこでエリカはまゆりの言葉に疑問を持った。

「……くん？」

「ん？ どうしたのエリカちゃん？」

「ねえまゆり、今、この子のこと“くん”って……」

「甘いぞおルカ子よお！ もっと腕に力を込めてえ！」

「はっ！ はいっ！」

と、そこで倫太郎の張った声が聞こえてきたのでエリカはそちらのほうを向く。

「腕に迸る地脈の力を感じるのだあ！ 一振り一振りにその力を流すように！」

「はっ、はいっ！」

「ちよ、あんた何させてんのよ！」

その様子を見たエリカは二人の間に割って立った。

「ん？ どうしたのだシルバーファングよ？」

「どうしたも何も無いわよ！ あなたねえ！ こんな可愛い女の子に何させてんのよ！」

「え？ ……ああ、そういうことか」

倫太郎は何か一人納得したように頭を抱える。

その態度が、エリカは気に食わなかった。

「何よその態度！ 私も武道をやってるから女の子が鍛えるのをどうこうは言わないけど、この子には向いてないでしょ！ あなたもあなたよ！ どうしてこんな理不尽な命令に従うの！ さ、行きましょ！」

そう言つてエリカは感情に身を任せたままルカ子の手を引き歩きだそうとする。

「ま、待つてください！ これは僕が好きで指導してもらつてるんです！ 岡部さんのような立派な男になりたくて！」

「だから……はい？」

そこで、エリカは止まった。ルカ子のその発言が、エリカを凍らせた。

「いや、ちよつと待つて。今なんて？ ……男？」

「え？ はい……」

「いやいやいやいや、ないないないない、私より可愛い子が男だなんて……」

エリカは頭を振って必死に否定しようとする。だが、そんなエリカの肩に倫太郎が手を置く。

「気持ちには分かるぞシルバーファンングよお。ルカ子は可愛いからなあ、だが男だ」

「そんな……そんな……」

「改めて紹介しよう。彼はラボメンナンバー〇〇六！ 漆原るか！ 女より可愛らしい姿をしている巫女だ！ だが男だ」

エリカはるるか男だったというショックからしばらく立ち直れず、その場に膝と手をつくのであった。

「はあ……」

やっと気を取り直したエリカが神社から離れる頃には、すっかり夕方になっていた。

「まあまあエリカちゃん元気出して」

まゆりががつくりとうなだれながら歩くエリカを笑顔で励ます。

「そうだとシルバーファンングよお。ルカ子を初見で男だと見破れるものはまずいない。

お前の勘違いも当然というものだ」

「だからその恥ずかしい呼び方止めて……ん？」

と、帰路につく一行の前に、一人の人影が現れた。

その人影は女性であり、どこか陰気な雰囲気を漂わせている。しかも、三人の前に立ちふさがったと思いきや携帯電話に向かって素早く指を動かしている。

「えつと……」

「おお、閃光シャイニングの指圧師フィンガーではないか。どうしたのだ？」

「シヤ、シヤイ……？ ああ、またそういう……」

さすがに連続して倫太郎のラボメン達と出会ってきたエリカである。この状況からそれを察することができた。

「……もしかして、この人もラボメン？」

「その通りだシルバーファングよ。こやつはラボメンナンバー——」

プルルル。プルルル。

「……っ」

と、説明しようとしていたところで、倫太郎の携帯電話がなる。それに対し、メールを返す倫太郎。

「こやつはラボメンナンバー〇〇五。桐生——」

プルルル。プルルル。

「……っ！」

再び携帯電話が鳴る。それにしかめっ面をしながらメールをまた返す倫太郎。



エリカは女性のほうを見る。すると、またものすごい速度で指を動かしているのが見えた。

「……もしかしてあの人、わざわざメールで会話してるの？」

エリカは二人を見てこっそりまゆりに聞いた。

「うん、そうなの。萌郁さん、恥ずかしがり屋なんだー」

「こやつは！ ラボメンナンバー〇〇五！ 閃光の指圧師あつ！ 桐生萌郁だつ！」

まゆりが回答した直後に、倫太郎が携帯を鳴らしながら自棄気味に言った。

「……えっと、どうも」

エリカは紹介された後に萌郁に対し、エリカは頭を下げる。

すると、萌郁はまたもポチポチと携帯電話のボタンを押し始めたかと思うと、画面を見せた。

『、・・∇・・〕ノヨロシク！ シルバーファンクさん！』

「……逸見エリカです！」

エリカは画面を見せる萌郁に、半ば叫ぶように言った。

「ふう……なんだかどつと疲れたわ」

夕方、エリカはそう言いながら未来ガジェット研究所のソファアにどつと背中を預け

た。

「お疲れーエリカちゃん」

「お疲れ様」

「お疲れでござる」

一緒に帰ってきたまゆりとラボで待っていた紅莉栖、至がエリカをねぎらう。紅莉栖はコーヒーをエリカのために用意し、自分でも飲んでゐる。

一方、倫太郎はいない。

「しかし、帰ってきたばかりなのに買い出しにいかせて良かったのかしら倫太郎」

「いいのよ。じゃんけんで負けた結果だから」

「はあ……」

そつけなく言う紅莉栖に、一体紅莉栖は倫太郎のことをどう思っているのか少し気になるエリカ。

「それにしても、秋葉原って変な人がいっぱいいるのね……」

「アキバというか、岡部の周りに変なのが集まってるって感じね」

「あなたも人のこと言えないと思うわよ？」

「ぶふっ!？」

紅莉栖の言葉に半目で返すエリカ。その言葉に、紅莉栖は飲んでいたコーヒーを吹き

出した。

「ど、どういう意味ぞ!？」

「そのままの意味よ。研究オタクっぷりは負けてないんじゃない? あとねらー言葉出てるわよ」

「んっ!？」

慌てて口を押さえる紅莉栖。

その二人の様子を見て、まゆりはエリカの隣で微笑んだ。

「もうすっかり仲良しだねー二人とも」

「そうかしら?」

「うん、そうだよー。紅莉栖ちゃん、わりと知らない人にはつんけんするのに、なんだかエリカちゃんとはすぐ仲良くなれたよねー」

「えっ、私って知らない人にはそんな冷たい!？」

「うーんそういう訳じゃないんだけど、なんとというかね? ちよつと距離を測る部分があるかなーって。でもそんな紅莉栖ちゃんも、エリカちゃんとはすぐ距離を縮められたから意外だなーって」

まゆりの言葉に考え込む様子になる紅莉栖。それに対し、エリカはニヤリと笑い、言った。

「それは、多分私達が今まで散々ネットで口論してきたからよ。ね、栗ご飯とカメハメ波さん」

「ぶふうっ!?!」

今度は何も飲んでいないのに吹き出した紅莉栖。

それに対し、不思議な顔をするまゆりと何かを察した顔をする至。

そして、不敵に笑うエリカ。

「な、なななななななななななななことかしら!?!」

「なんのこともないわよ。あなたの言動とか、倫太郎に対する当たり方とか見ててピンと来たからカマかけてみたけど、どうやら凶星らしいわね。クソコテで有名な栗ご飯とカメハメ波さん」

「な、何よ!?! そつちこそクソコテ代表みたいなコテハンじゃない!?! 疾風戦車123!?!」

「はあ!?! あなたや倫太郎はそうでしょうけど私のどこがクソコテよ!?!」

「クソコテもクソコテじゃない!?! いちいち他人に噛み付く様はすつごくクソコテよ!?!」

そこから口論を始めるエリカと紅莉栖。その様子を、至は呆れながら、まゆりは楽しそうに見ていた。

「ただいま……と、うんんん!」

そのタイミングで帰ってきた倫太郎は、喧嘩をしている最中のエリカと紅莉栖に出くわした。

「この単細胞戦車バカ!」

「何よ! この理系オタク!」

「……ダルよ。この状況はどういうことだ?」

「オカリンも含めて、ただのクソコテオフ会だと思われ」

「ふふつ、本当に仲がいいなあ二人共」

不思議そうな顔をする倫太郎に、なんとも言えない顔をする至。そして、言い争う二人を楽しそうに見つめるまゆり。

そうしているうちに、その日の夕日はだんだんと沈んでいき、エリカの一日は終わったのであった。

翌日、昼。

エリカはまたも未来ガジェット研究所に来ていた。

秋葉原観光はだいたい終えた。しかし、まだ時間に余裕があると云ってなんとなく未来ガジェット研究所に来ていたのだ。

「……んー、これ！」

「残念でした。じゃああなたのウィルスカードはそれでしょ？　だからこれ」

「あああああああああつ！」

エリカは紅莉栖と共に流行りのカードゲーム、雷ネットを遊んでいた。

昨日の喧嘩から抜き差ししない関係になった二人は、時折口喧嘩をしつつも一緒に遊んでいたのだ。

「ふっ、哀れだなシルバーファングよ。助手にそこまで負けてさぞ悔しいであろう。もしよければ俺が手ほどきをしてやってもいいぞ？」

「やめときなさい。岡部は癖がわかり易すぎてすぐ駄目になっちゃうから」

「なっ、駄目になるとはなんだ！」

今度は倫太郎と口論を始める紅莉栖。その様子を見て、なんとなく楽しげな表情を浮かべるエリカ。

そのエリカの表情を、まゆりがさらに見つめていた。

「……何よまゆり」

「ううん。たった数日なのに、私はエリカちゃんがラボに馴染んでくれて嬉しいなあって思うのです」

「馴染んでるかしら？」

「馴染んでるよー」

まゆりに言われ、そうかなとなんとなく思うエリカ。

一方紅莉栖と倫太郎はすっかりエリカを差し置いて喧嘩をヒートアップさせており、エリカのことはいえなくなっているようだった。

そんな二人を見て、エリカはぼつりとこぼす。

「……私もあの子とこんな風に喧嘩していれば、未来は違ったのかしらね」  
「ん？ どうしたのエリカちゃん？」

まゆりがふと変わったエリカの雰囲気質問する。そのまゆりの表情に気づき、エリカはふるふると首を振る。

「ううん、なんでもないのよ。なんでも」

プルルルルル。プルルルルル。

と、そこで突如エリカの携帯電話が鳴り響いた。

「あら……隊長？」

それは、戦車隊の隊長、まほからの電話だった。

エリカはなんの疑問も持たずにその電話を取る。

「はいもしもし、なんですか隊長……はあ!!? う、嘘っ!？」

と、そこでエリカが突如大声を上げたため、まゆりが驚き、倫太郎と紅莉栖は口論を

止め、更にパソコンに向かって何かしていた至もまた振り返った。

「はい……はい……分かります、ました……」

そして、エリカは意気消沈して電話を切る。

「どうしたの、エリカちゃん？」

まゆりが聞く。そして、エリカは言った。

「学園艦の出港する日、間違ってた……昨日だった……」

その言葉に、まゆり、紅莉栖、至は驚いた表情をする。

「ええ!? あなた、それ大変じゃないの!？」

「あらららー、大変なのです」

「うーん、それって帰れないってことだよ。どすんの？」

「うう、本当にどうしよう……」

涙目になるエリカ。同情するまゆり、紅莉栖、至。

だが、一人だけ不思議そうな顔をしている男がいた。倫太郎である。

「……なあ、ちよつと待ってくれ」

「……何よ」

そして、倫太郎は聞いた。

「学園艦って、何だ？」



その言葉に、場の空気が固まる。

「……は？ 何言ってるのよ倫太郎。学園艦は学園艦じゃない。学校と街が乗った船よ」

「……え？」

「そうよ岡部、岡部だって昔は学園艦の学校に通ってただろうに何言ってるの？」

「そうだよオカリナー。私やルカくんだって夏休みだから学園艦を降りてこうしてアキバにいるんじゃない」

「そうそう、それに逸見氏の乗ってる学園艦は戦車道の強い黒森峰ぞ。有名ではありませぬか」

「いやいやちよつと待て!? お前達こそ何を言っているんだ!? 学校の乗った船!? 戦車道!? な、何を言ってる……」

「だから、学校を乗せた全長数千キロメートルの空母が学園艦、そして、特殊なカーボンで守られた戦車同士で戦う競技が戦車道。こんなの常識じゃない」

「……ま、まさか……!?」

当然のように言うエリカに対し、青ざめた顔をする倫太郎。その倫太郎の様子に、紅莉栖が何か気づいた。

「はっ!?! 岡部、まさか……!?!」

「え？ どしたの……って、まさか……」

そこで、至も何かに気づいたように真剣な声を出す。何がどうしたか分かっていないのは、エリカとまゆりだけだった。

「え？ ちよ？ みんなどうしたの……？」

「岡部……そういうことなの……？」

「ああ……そうだ。戦車道、学園艦それらすべて……！」

そして、倫太郎は言った。

「過去改変の、Dメールを送った結果生じた、別の世界線だ……！」

## 第3話

それは、時系列として並べるならばエリカが秋葉原に来る直前に当たる頃だった。

「どれだけ古い過去にDメールを送れるかの実験？」

紅莉栖は倫太郎の提案を聞いて、疑問の声を上げた。

「そうだ、我々は過去にメールを送る技術、Dメールを開発した。そして、それによって過去改変にすでに成功している」

「改変と言っても口ト6の微妙に外しただけだけだね」

「黙れダル！ とにかく、これによりDメールの性能は証明された。次は、どれだけ過去にさかのぼれるかを試してみるのがいいのではないかと思うのだ」

「なるほどね。確かに、どれだけの範囲試せるかを調べてみるのはいいかもしれないわね。有効範囲を確かめるのも実験の一つだわ」

紅莉栖は頷きながら言う。

「で、どれくらい過去の過去に送るつもりなの？」

「ふっふっふ、それはだな。ダルよ！」

「はいはい」

倫太郎が至るに向かつて手を伸ばすと、至は紅莉栖にパソコンの画面を見せた。そこには、白黒の画像と共にずらりと文字が並んだ画面が映し出されていた。

「これは……第二次大戦系の紹介サイトかしら？ 紹介されているのはアメリカ軍ね？」

「その通りだお。これは@ちゃんねるの軍板でもかなり信頼のあるソースだつて言われているサイトなんだお。その中に、実行されなかつた作戦という欄があつて、これはその一つだお」

「ちよつと、軍の作戦なんか動かして大丈夫なわけ？ というか、そもそもメール送れるの？！」

「それに対しては問題ない。作戦と言つてもただの輸送任務らしいからな。なんでもカーボンブラックを運ぶだけらしい。それに送れるかどうかもお大丈夫だ。ダルの言つていたサイトに当時使われていた周波数が書かれていた。今では使われてないそうだからな。それに、Dメールを送るようメールをこちらで細工すればよい。そして、メールの内容はモールス信号だ。これなら、簡単な命令なら送ることができるはずだ」

「はあ……よく考えつくわね、そういうの」

「ふうん！ 何せ俺は狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真だからな！ これぐらい難もない！」

呆れ顔で言う紅莉栖に対し、自信ありげに言う倫太郎。

その様子をソフアーから眺めていたまゆりは、その倫太郎達を不安げな表情で見る。

「うーん、大丈夫なのかなあ。軍隊さんに変な命令送って怒られないかなあ」

「心配するなまゆり。もう七十年は前の作戦だ。怒られることはない」

「んー、ならいいんだけど……」

まゆりはやはりどこか納得のいつていない様子だった。それに対し、倫太郎、紅莉栖、至はすでに乗り気で準備を始めていた。

「こっちは準備できたおー」

「さすが橋田。準備早いわね」

「牧瀬氏。その早いわねっていうのもっと上から目線でもう一度」

「え？　はや……ってあんたねえ!？」

「ダルよ。セクハラもいい加減にしないと本当に刺されるぞ。……とまあそんなこともかく、早速実験開始だ！　……ええと、GOをモールス信号で表すと……『――、

――』か。よし、これならDメールで送れる文字数の範囲内だ」

倫太郎はメールの文面にモールス信号を表す記号を打ち込む。

そして、倫太郎が準備をし終わると至がDメールを送るための未来ガジェット、電話レンジを起動する。扉が外れた電子レンジに携帯をくっつけたものだ。

その電話レンジが動き出し、扉の外れたレンジの中身から放電現象が発生する。

「今だっ！」

倫太郎はそのタイミングを見計らってメールを送る。

すると、突如倫太郎の視界が歪んだ。

「うっ!?!」

頭が痛み、平衡感覚が失われる。その感覚を、倫太郎は知っていた。

「リーディングシュタイナー……!?!」

リーディングシュタイナー。

倫太郎が並行世界、世界線を移動したとしても記憶をそのまま残すことのできる彼の持つ特殊な力である。

視界の歪み、頭痛、平衡感覚の喪失は世界線を移動したときに訪れる特有の症状だ。

倫太郎はそのリーディングシュタイナーが発動した後、周囲を見回す。

彼が見る限り、ラボは特に変わりなく、皆普通にしていた。

そこで、倫太郎はパソコンの前に座っていた至に話しかける。

「ダル!・ @ちゃんねるの軍板でソースとして使われているサイトの、実行されなかった作戦欄を見せてくれ!」

「え、ちよ今エロゲやってて……どしたの?」

「いいからー」

至に半ば無理矢理。パソコンで情報サイトを見る。すると、そこには倫太郎が以前確認したときとは違って、実行されなかった作戦欄に、輸送作戦は乗っていないかった。

「……ない……ということとは、成功したのか……？ ……ふっふふ、フツハハハハハハハ！ 俺達はまた歴史という巨大な相手に勝利したようだ！」

高らかと笑い出す倫太郎。その倫太郎を見て疑問符を浮かべるラボメン達。

そんな風に倫太郎が高笑いしている瞬間と、エリカが秋葉原駅に到着したのは、ほぼ同時だった。



「……何よそれ……私の、私達の存在が、あなた達の実験の結果だって言うの……？」  
エリカは、倫太郎からすべてを話され、茫然自失としながらもなんとか言葉を捻り出した。

「ねえ……いつもの厨二病的な冗談なんですよ……？ はは、ありえないわよね、過去改変だなんて……過去へメールを送るだなんて、そんな……ねえ、紅莉栖……！」

「……………」

倫太郎も紅莉栖も答えない。二人共、重々しい顔をするばかりである。倫太郎だけならまだ冗談と笑い飛ばすこともできた。しかし、紅莉栖もまた真面目な表情を浮かべているため、それが本当のことなのだという説得力をエリカに与える。

「そ、そもそもなんでただの輸送計画で歴史が変わるのよ!? おかしいでしょ!? ね、ねえ至!?!」

「それが……ちよつと調べてみたんだけど、どうもあの計画には都市伝説があるみたいなん。なんでも、今現在学園艦や戦車道の戦車に使われている特殊なカーボンを生成する計画だったとかなんとか……」

「そ、そんな……」

至までもが苦々しい顔でエリカの否定したい事ばかりを言う。

そうやって言葉を重ねられる度に、それが真実だと分かる度に、エリカは自分の足元がグラグラとぐらついているような感覚に襲われた。

「エ、エリカちゃん……」

まゆりが心配そうな顔でエリカの顔を覗いてくる。本当に心配している顔だと、エリカは思った。それは、まゆりもまたその実験が本当であると知っていることの証左でもあった。

「……何よ……何なのよそれ……何なのよ! ふぎけないでよ!」



エリカはそこでついに激高し、ラボから走って出て行ってしまおう。

「エリカっ!」

「エリカ!?!」

倫太郎と紅莉栖がエリカの名を呼ぶも、エリカは立ち止まることなくラボから消えてしまった。

「……何なのよ、何なのよ一体……」

エリカは一人うずくまっていた。場所は、未来ガジェット研究所のある建物の屋上の隅。エリカは走り去ったのはいいものの、どこかへ行くのでもなく、一人屋上へと向かっていったのだ。

「ありえないわよ……そんな、私達のすべてが、こんな小さな場所の実験から生まれただけなんて……」

エリカは涙声で膝に顔をうずめながら言った。エリカは今、ひどい孤独感に襲われていた。

世界でまるでひとりぼっちになったかのような、そんな感覚だった。

「ありえない……認めないんだから……」

エリカはそんなことばかりを、一人ぶつぶつと呟く。

そんなときだった。

「あつ、いたつ！」

エリカの後ろから、突如声が聞こえてきた。

それは、屋上の扉を開けてやって来た、紅莉栖だった。

「こんなところにいたのね、灯台もと暗しつて奴だわ」

「……何よ。こんな惨めな私になんの用？」

エリカはうつすらと流れていた涙を拭い、紅莉栖の方へと振り向いて言った。

「なんの用、じゃないわよ。突然走り出していったらみんな心配するじゃないの。……

ま、私が言えたことじゃないか」

「んっ」

紅莉栖の最後の言葉は小声だったためエリカにはよく聞こえなかった。

そんなエリカが紅莉栖の言葉に僅かな疑問を抱いているうちにも、紅莉栖はどんどんとエリカの元に近づいてきて、やがて彼女の隣に座る。

「……岡部とまゆり、あなたのこと心配して探しに出てるわよ」

「……そんなの知ったことじゃないわよ」

「あら、冷たいのね」

「そうよ、私は冷たい女なの」

紅莉栖の言葉に彼女の方を向かずに答えるエリカ。だが、紅莉栖はそんなエリカに決して怒り出したりせず、優しく語りかけた。

「……あんたの気持ち、少しだけ分かるかも shouldn't」

「はあ!?! あなたに何が分かるって言うのよ!?! 私はすべてを否定されたのよ!?! 私の生きていた、すべてを!」

「……そうね。あんたのシヨックは計り知れないものよね。それはきつと、私が味わったものの何倍もひどいものだと思う。でもね、私も最初あの電話レンジが過去にメールを送れるタイムマシンの一種だって知ったとき、ひどくシヨックを受けたの。そんなのありえない、馬鹿馬鹿しいって、ちよつと家庭環境とかの問題でそう思ってたから。私の考えの根底が思いっきり覆されたっていうか、なんていうかそんな感じ」

「……そうなの。その、あなたも色々、大変だったのね……」  
「ええ」

エリカは紅莉栖の話を聞いているうちに、いつしか彼女の方を向いていた。

一方紅莉栖は、ずっと上、青い空を眺めていた。

「でね、それでもやっぱり私は研究バカだから、やっぱりそのタイムマシンのことを研究したくなって……というのも、あのバカと話してたらそうなったんだけどね」

「あのバカって……倫太郎のこと?」

「ええ、そう。あいつは去ろうとしていた私を無理に引き留めようとはしなかった。ただ、私の研究者としての心をくすぐるようなことばかり言つて……いつしか、ラボに取り込まれちゃつてたわけ」

「ふうん……」

紅莉栖はそう言いながら屋上に仰向けに寝そべる。エリカもまた、一緒に紅莉栖の横に仰向けで寝そべる。

「それで、いつしかこうして一緒にいろいろバカする関係になつちやつたのよね。不思議よね、人の因果つて」

「そうね、ラプラスの魔でも計り知れなさそう」

「あら、ラプラスの魔は物理学的には否定されてるわよ?」

「知つてるわよそれぐらい例えで言つてもいいでしょ」

「……ふふっ」

「……くすっ」

紅莉栖とエリカは、いつの間にか互いにそれぞれの顔を見合わせながら笑つた。

そして、二人は仰向けになつた状態からゆっくりと立ち上がる。

「……ごめんなさい」

「え?」

そこで、急にエリカが紅莉栖に誤った。

「ラボで怒鳴り散らして。あなた達が故意に今の世界……世界線？　という奴を作ったわけじゃないのは分かってるの。でもやっぱり、おちつかなくて……」

「大丈夫よ。あなたには怒る権利があった。あなたはそれを行使した。ただそれだけの話よ。それに、軽はずみに過去改変なんかした私達にも責任があるわけだしね」

「それは——」

否定しようとするエリカ。だが、そのエリカの口を紅莉栖が人差し指で制止する。

「いいの。そういうことにしておいて。あなたはマッドサイエンティストの悪事の被害者。それでいいの」

「……ええ、じゃ、そういうことにしようかしら」

紅莉栖が人差し指を離すと、エリカは笑顔でそう言う。エリカは、先程まで胸に溜まっていた怒りや悲しみがすつと消えていくのを感じた。

「さ、それじゃあラボに戻りましょう。岡部達には私から連絡しておくから、三人で待ちましょう」

「え？　三人って……」

「橋田よ。あいつは留守番でラボで一人待たされているの」

「……損な役回りなのか役得なのか」

「橋田的には、絶対得だと思ってるはずよ」

エリカと紅莉栖はそんなことを話しながらラボに戻ったのだった。

「おお、戻っていたかエリカよ！」

「ええ、戻ってたわよ」

「うう、エリカちゃんが戻ってきてくれてまゆしいは嬉しいのです」

その後、ラボに戻ってきた倫太郎とまゆりがそれぞれ笑顔を見せながらエリカに言った。

「悪かったわね、急に痲癩起こしちゃって。私の悪い癖だわ」

「いいのだシルバーファングよ。貴様はこのマッドサイエンティスト鳳凰院凶真の哀れな犠牲者の一人に過ぎぬのだからな。世界が変革されるとき、もつと大勢の犠牲者が出るだろう。貴様はその第一号であるのだ！」

「……まったく、そうなのよねえ」

「ん？」

倫太郎のノリに怒るのではなく乗ってくるエリカに、倫太郎は疑問符を浮かべた。

そして、次の瞬間エリカは倫太郎が驚く発言をする。

「私は犠牲者なんだから、その責任をマッドサイエンティストさんに取ってもらわない

とね」

「んなつ!？」

「そうねえ……それじゃあ、次の学園艦が来る日まで、私の宿、どうにか手配しなさい。なるべくお金のかからないように、というか出費はできるだけそつちが持つような形で。だって私は犠牲者ですもの。それぐらいさかれて当然よねえ?」

「うぐつ!? た、確かにそうだが……どうする……俺もあまり金がないぞ……」

狼狽する倫太郎。その様子を見て、くすくすと笑うエリカ。

「冗談よ。宿はこつちでなんとか——」

「よし分かった!」

「え?」

今度はエリカが倫太郎の強気な言葉に疑問符を浮かべた。

「この鳳凰院凶真が、貴様の宿の面倒を見てやろうと言うのだ。感謝するがいい。このような厚遇、世界の変革以上にレアなことだぞ!」

「いい、いいの……? 本当に……?」

「当然だ。迷惑をかけたのはこちらなのだから。その、世界線のことでも、それにアキバを連れ回して帰る日を勘違いさせたという意味でもな。……だが、シルバーファングよ。貴様はこれよりこの鳳凰院凶真からの恵みを受け取るに際し、一つだけ条件があ

る。それは……」

「そ、それは……?」

エリカはゴクリと唾を飲む。そして、倫太郎は言った。

「我がラボメンとなることだ!」

「……はい?」

「貴様はこれより、ラボメンナンバー〇〇九! シルバーファング、逸見エリカだつ!

これよりその獣の如き鋭さを、ラボのために役立てるがよいっ!」

「……ふ、ふつ、何よそれ。つまり、あなた達の仲間にしてくれるってことじゃないの」

「……ま、とどのつまりそういうことね」

エリカと紅莉栖が笑いながら言う。

「……ふふつ、本当にあなたたつて面白い人ね、ふふふつ……」

「な、なんだ。そこまで笑うことか」

「ええ、だつてとつても面白いもの……! ふふふつ……! ……ふう。ええ、なるわ。

倫太郎。私、ラボメンになってあげる。よろしくね、みんな」

エリカは両手を腰に当てながら、ニヤリとニヒルな笑みを浮かべながら言った。

その言葉に、倫太郎達は笑顔になる。

「ああ、よろしくたのむぞ! シルバーファングよ!」



「よろしくエリカ！」

「よろしくなのだよー逸見氏！」

「よろしくっ！ エリカちゃん！」

こうして、エリカは未来ガジエツト研究所の一員となったのであった。

## 第4話

「だからね、浸透戦術でじわじわと戦線を拡大していくのが私の戦術なわけ」

夜、エリカはラボにて胸を張るように高らかに話していた。

「なるほどねえ……勉強になるわ、使い所はあるかわからないけど」

それを聞いていたのは紅莉栖とルカだ。

「あの、僕はよくわからないです、すいません……」

「いいのよルカは。あなたが戦車戦のドクトリンを理解したらびつくりよ」

「そうでしょうか……」

少し寂しそうな顔をするルカ。そのルカの表情に少しばかりの罪悪感を覚えつつも、話しを続けようとする。

「まあいいわ。続けるわよ。分からなくても聞いておくことが大事だからよく聞きなさい」

「あの、私そろそろ料理したいんだけど——」

紅莉栖が言う。すると、エリカは焦ったように喋りだす。

「あーそれよりもね！ 戦車というのは思ったよりも種類があつて——」

「おーい、戻ったぞ」

「トウツトウルー！ 帰ったのです！」

と、そこへラボに帰ってきたのは倫太郎とまゆりだった。倫太郎の手には二人の手には大きなビニール袋が握られている。

「あら、お帰りなさい二人共」

「おかえり」

「おかえりなさい」

紅莉栖、エリカ、ルカがそれぞれ倫太郎とまゆりにおかえりを言う。

倫太郎とまゆりは床の上にどんとビニール袋を置いた。

「ふう……とりあえず、必要なものは買ってきたぞ」

「お疲れ様。とりあえずこれで開けそうね、阿万音さんの祝いの会または残念会」

「そうだな」

倫太郎は紅莉栖の言葉にコクリと頷く。

彼らは、鈴羽がずっと探しているという彼女の父が出るといふオフ会に行くため、その結果次第で祝いの会、または残念会を開くための準備をしていたのだ。

倫太郎はラボを見回す。ラボは、ある程度料理の準備がしてあるもまだ手がつけられていなかった。

「それにしても、まだ料理の準備をしていないのか？ そろそろしたほうが……」  
「それが聞いてよ倫太郎！」

と、そこでエリカが倫太郎に叫ぶ。その叫びはある種の悲鳴のようでもあった。

「お、おう？」

その迫力に、倫太郎は気圧される。

倫太郎が答えに困っている間にも、エリカは続ける。

「紅莉栖ったら、料理作るとか言いながらなんだかおぞましいものを作ろうとしたのよ！？」  
「あなたが来るまで引き伸ばすの大変だったんだから！」

「ちよ、あなたが突然戦車とかの話し始めたのそういうことだったのね！？ 何よおぞましいものって！ ただのアップルパイでしょ!？」

「なんでアップルパイにしいたけとゆで卵が必要なのよ！」

「付け合せのサラダにするに決まってるでしょ！」

「それはそれでおかしいのよ！」

喧嘩をするエリカと紅莉栖に、倫太郎は頭を抑えた。

「あー……とりあえず助手が悪いのは分かった」

「なんでそうなるのよ!？」

納得のいつていない紅莉栖に、勝ち誇った様子のエリカ。

紅莉栖はまだ不満そうだったが、エリカが料理を作るといふ流れになったために、しぶしぶ引き下がった。

そのまま一行は残念会の準備を勧める。

途中、至がフェイリスの手料理を食べさせてもらえると騙されて帰ってきたり、ルカが未来ガジェット四号機である瞬間加湿器「モアッド・スネーク」を作動させ部屋中をびしょびしょにしたり、紅莉栖が見つつけ出した、掃除機とドライヤーをつなげた未来ガジェット五号「またつまらぬものを繋げてしまったby五右衛門」のせいでブレーカーが落ちたりといろいろなことがあったが、一応の準備はできた。

そうして準備を終えた一行だったが、鈴羽は一行に現れない。

時刻はそろそろ十一時になろうとしていた。

「遅いねー鈴さん。お父さんに会えたかなー?」

まゆりが時計を見ながら言う。

「今頃親子水入らずで楽しんでるんじゃない?」

「でしようね。せつかくの再会ですもの。こんな時間になるのも無理ないわ」

紅莉栖がまゆりに返し、エリカが続く。

そんな三人の会話を聞きながら、倫太郎は窓から外の様子を伺っていた。

「どちらにせよ、ラボには寄れと言っているのだが……しかし、もうこんな時間だ。お前

達はもう帰れ」

倫太郎はそう言って、ラボメン達を帰す。

エリカもまた、ラボから出ていこうとする。

「それじゃあね倫太郎。また明日」

「ああ、そうだな。そういえばどうだ、フェイリスに紹介してもらった部屋は」

「ええ、とても快適よ。最初に私が取つた宿よりも過ごしやすいぐらい。しかしフェイリスが秋葉原の大地主だなんて、あなたの人脈つて本当になんなの？」

「ふつ、この鳳凰院凶真の元には運命に導かれしツワモノ達が自ずと集まってくるのだ……これもまた、シユタインズ・ゲートの選択……！」

「はいはい」

エリカは笑いつつも、倫太郎の言葉を軽く流しながら玄関で靴を履こうとする。

「……お前もだぞ、エリカ」

「え？」

と、そこでいつもと違う倫太郎の声色に、エリカは足を止める。

そこで倫太郎の方を向くと、倫太郎は窓を背にし、エリカの方を微笑みながら見ていた。

「確かに最初は俺達の実験のせいだったかもしれない。でも、お前がアキバに来て、俺達

と出会ったのはそれはもう必然だ。俺達は、仲間になるべくしてなったんだ」

「仲間……私のこと、そう思ってくれるの?」

「当然だ。お前はラボメンナンバー〇〇九、シルバーファング逸見エリカだ。俺の、大切な仲間の一人だ」

「倫太郎……」

エリカは倫太郎のことをしばらく見つめる。そして――

「……なにそれくっさ!」

口元を抑えぶつと吹き出しながら倫太郎に言った。

「なっ!? そこは感動し目に涙を浮かべるシーンではないのか!」

「私がそんな柄に見える? ……でも、そう言ってもらえて嬉しいって気持ちもちやんとあるわ。ありがとうね、こんな私のこと、仲間だなんて言ってくれて。思えば、ここまでバカみたいにできる友達、初めてかもしれないしね」

「そうなのか?」

倫太郎がエリカの言葉に不思議そうに反応する。

エリカは「ええ」と言いながら一旦靴を履くのを止め、玄関の壁にもたれかかった。

「私、まあ多分倫太郎達も分かっているけど結構キツイ性格でしょ? それで気性の荒い戦車乗りの多い黒森峰じゃあ、わりとギラギラとした付き合いばかりだったのよね。」

それでもない子もいるんだけど、昔ちよつとした事故があつたせいで一人は転校しちゃつたし、もう一人は未だにどこかで私に遠慮してる気がするのよねえ。私がそう思っているだけかもしれないけど。ま、それもこれもその事故があつたときに私の対応が悪かつたせいもあるんだけどね」

「事故か……聞いても？」

倫太郎が言葉には出さないが嫌なら聞かないというような雰囲気を出しながら聞いてくる。

エリカは、それにゆつくりと頷いた。

「いいわよ、別に隠してることじゃないし。調べれば出てくることだしね。……去年ね、私の学校の十連覇がかかつた決勝戦で、フラッグ車——それをやられると負けになる戦車ね——を守つてた戦車が川に落ちちやつたの。それで、その戦車にさつき言つた遠慮してる子が乗つてて、フラッグ車に乗つてた副隊長の子、その子が転校しちやつた子なんだけど助けに行つちやつたの。おかげでフラッグ車は動けなくなつて撃破。私達のチームは負け」

エリカはそこで一旦天井を眺めた。それは、過去の忘れられない記憶を思い出して、複雑な感情が露わになるのをなんとか隠したかつたからだつた。エリカは天井を向いたまま話を続ける。



「その後私ね、その助けに行つた子に言つちやつたわけ。『どうして助けに行つたんですか!』ってね。あ、勘違いしないですよ? 別に人命を軽視してたわけじゃないわ。戦車道は基本安全なスポーツだから、水没しても安全は保証されてるはずなの」

エリカは「そこ、重要だからね!」と指を立てて倫太郎に言う。

倫太郎は「ああ、大丈夫だ」と頷きエリカに話の続きを促す。エリカはまた話を続ける。

「だから、その助けに行くつていう行為は見方によつちや無駄とも言えるわけ。でもあの子は助けに行つた。なんでかかって聞くと『放つておけなかつたから』ってね。あの子らしいわ。でも、私はそれに激昂した。私だけじゃなく、最後の大会だった先輩方とかも。それでいつしか、あの子や戦車に乗つていた子達はどんどんと学校で居場所を失つた。それで、戦車に乗つてた殆どの子は転科するか学校辞めるかしちやつて、助けに行つたあの子も転校しちやつた……」

「そうか、それは大変だった——」

「で、(ここ)で終われば悲しい話だったのよ!」

倫太郎が話を理解し、思いやろうとしたとき、エリカはぐいつと倫太郎に顔を近づけ大声で言つた。

「へ?」

「それがね！　あの子、転校した先でも戦車道普通にやってたのよ！　てつきり戦車道から去ったものとはびっくり思ってたのに！　それを知ったときもう私の頭は混乱とか怒りとかでいっぱいになっちゃってもうぐちゃぐちゃで！　しかもその後喫茶店で偶然会って！　友達とお茶してて！　それ見て思わず言っちゃったのよ！　『副隊長？

ああ、元でしたね』って。最高に嫌味な感じで！　もうそれっからずっとあの子との関係拗れっぱなしよ！　もうどうすんのよこれ！　変にできた距離今でも埋まってないのよ!?　あーもー面倒くさい！」

「お、おう……」

わしやわしやと頭をかきむしりながら言うエリカに、倫太郎はたじたじになりながらそう返すしかなかった。

エリカは興奮しながらその後も敗北した今年の大会のことなどを語ったが、とても感情的に語ったためイマイチ要領を得なかった。

「……とまあ、だいたいこんな感じよ。要約するとまあ、私が悪いっていうだけの話なんだけどね」

「そ、そうか……しかしだな、シルバーファンングよ」

エリカの話をすべて聞いた倫太郎は、一旦落ち着き、そしてエリカに言った。

「何もお前の言うように、すべてお前が悪いというわけではないのではないか？」

「……え？」

エリカは倫太郎にそう言われキョトンとする。

倫太郎は続ける。

「確かに、お前の反応が悪かったところは大きいある。だが、大事な大会で優勝を逃して冷静でいられるなら、それはそこまで打ち込んでなかったということになる。むしろ、今にまで尾を引くぐらいに怒ったのは、それはお前が戦車道に熱心に打ち込んできたからではないか？ 喫茶店で会ったときもそうだ。どうしても譲れない部分が、お前にあつたんだろう。それで嫌味になるのもわからんでもない。というか、そうならないと性格の悪いお前らしくない」

「……そうかしら」

「ああ、そうだ」

呆気に取られていたエリカは、静かに倫太郎に答えると、少しの間黙り、そして、笑いだした。

「……つぶつぶ、あつっはははははははははは！ 私の性格の悪さ、そんな風に肯定してくれたの、あなたが初めてよ！ あー、なんかすつごくおかしい！ あつはははははははははははは！」

「……そこまで笑うことか？」

「ええ、笑うことよ！ あつはははははははははは！ あなたつて本当に、変なやつね！」  
エリカはそう言った後もしばらく笑っていた。

倫太郎は大声で笑うエリカにどう対処していいか分からず、視線を横にやりながらポリポリと頬をかいたりなどした。

「……………ふう」

そして、やっとエリカは笑い収める。そして、笑顔のまま倫太郎を見て、言った。

「ありがとう、倫太郎。なんだか楽になったわ」

「ん、そうか、ならよい。ラボメンのメンタルケアもこの鳳凰院凶真の大事な使命だからな」

「人体実験に使えないから？」

「仲間だからに決っている」

「そう……………ふうふう」

エリカは倫太郎に向かって軽く笑い、今度こそ玄関で靴を履いた。

「それじゃあ倫太郎。今度こそまた明日」

「ああさらばだシルバーファングよ。もしその友人とこれからもやりづらいとなつたときはいつでも呼ぶがよい。この俺が、完璧な対話術で関係を取り持ってやろう」

「間に合ってるからいいのよ。……………それにしても、意外ね」

靴を履き終え、今にも玄関から出ようとしたエリカが、思い出したように言った。

「ん？ 何がだ」

「こんなにおせっかいなあなたが、鈴羽のこと尾行しなかったなんてね」

「ああ、そのことか……しようとは思ったのだがな」

倫太郎は急に思いつめるように腕を組む。そして、ポケットからふいと携帯電話を取り出して、画面を見ていた。

「ん？ 思ったのだけど、どうしたの？」

「……いや、なんでもない。ただ助手に正座させられるのはもうゴメンだと思っただけだ」

「何よそれ。まあいいわ。それじゃあね倫太郎、また明日」

「ああ、また明日」

そうしてエリカはラボから去っていった。ラボには、倫太郎一人が残された。

倫太郎の携帯電話の画面はメール受信画面であり、そこにはこう書かれていた。

『尾行は中止。前のはSERENの罠』

それは、未来の倫太郎からのDメールだった。



「タイムリープマシン、ねえ……」

エリカは電話レンジの前に立ち、半信半疑の様子で見ている。

目の前にあるのは、電話レンジにパソコンやヘッドセットをくっつけただけのもの。少なくとも、エリカにはそうにしか見えなかった。

「本当にそんなことできるの？」

「ええ、理論上はね、説明したでしょ？ 完成したときに」

紅莉栖がエリカの後ろから現れ言う。ラボには、エリカ、紅莉栖、至、まゆりの四人がいた。

エリカは紅莉栖の言葉に怪訝な顔をしていた。

「まあ、今更疑う気はないわよ。Dメールのこともタイムリープマシンのこともね。ただ、ブラックホールで記憶を圧縮してそれを携帯の電波で過去の自分に送るといのが、なんとつかぶつ飛んでるなあと思っただけよ」

「まあ気持ちは分かるお。オカリンが公表するって言ったから試してないしねえ」  
パソコンの前に座っていた至が振り返って言う。

だが、その言葉とは裏腹に彼はその事実を疑ってはいないようだった。

「まゆしいはよくわからないのです。でも、オカリンが辞めるって言うてくれたのは嬉

しかったなあってまゆしいは思うのです」

ソファーに座っているまゆりが言う。

「そうねえ。でもまさかあの倫太郎がそんなことを言うなんて……ちよつと意外」

「ま、あなたの気持ちは分かるわ。私も最初は——」

そのときだった。ガチャリとドアが開かれる音がした。

「あら、お帰りなさい。倫太、郎……？」

エリカが振り返ると、そこには倫太郎がいた。しかし、何か様子がおかしかった。

どこか暗い顔をしており、いつものような覇気がない。

「……どうしたの？ 倫太郎」

倫太郎は答えない。ただ黙って倫太郎はラボに上がると、紅莉栖の手を引き屋上に部屋を出ていった。

「え？ ちよ……なんぞ!？」

「いいから来い！」

倫太郎の紅莉栖を連れて行く剣幕はものすごいものがあった。

エリカ達は、ただそれを眺めていることしかできなかつた。

「……何？ なんなの？」

「……さあ」

「オカリン……」

取り残された三人は、ただ言葉を失ってその場に立っていることしかできなかった。  
しかし――

「……私、ちよつと見てくる！」

「あつ、エリカちゃん!？」

エリカは動いた。なぜだか倫太郎と紅莉栖を放つて置くことができなかつたのだ。

二人はきつと屋上にいるだろう。何か倫太郎が困っているなら、力になりたい。そう、エリカは思った。

エリカは階段をゆつくりと上がる。

そして、屋上の扉に手をかけたときだつた。

「まゆりが、死ぬ……!？」

「ああ……」

「……えっ!？」

それは、紅莉栖と倫太郎の会話だつた。紅莉栖の驚く声と、倫太郎の力のない声が聞こえる。

エリカは必死で声を抑えた。

「岡部、あんた……」



「俺は何度もタイムリープをしてきてその光景を観てきた。まゆりが、SERENの手先に、世界に殺されるころを！……そして、それを阻止するにはIBN5100が必要で、それを手に入れるにはDメールを取り消して変えた過去を戻さなければいけないんだ」

「そう……だったの。それで、今度消さなければいけないメールは……」

「それは……」

倫太郎は言い淀んでいた。その様子から、倫太郎が好まないあまりいい返答ではないのは分かった。だが、エリカにはその内容がうつすらと分かった気がした。

「もしかして……」

それは、どうやら紅莉栖も気づいたようだった。

倫太郎は観念したかのように、口を開いて、言った。

「……ああ。過去に米軍に送ったDメールを……逸見エリカの世界線を……消さないといけないんだ……!」

## 第5話

「エリカの世界線を、消す……!?!」

紅莉栖は倫太郎の言葉に驚愕した。

「……あんた、それ冗談じゃないのよね……」

「こんな冗談を言う奴があるか……!」

倫太郎は表情を引き締める紅莉栖に対し、うなだれながら答える。

言葉を失う紅莉栖。それに対し、倫太郎は顔を上げ、苦し気な様子で続けた。

「さっきも言った通り、俺はまゆりを助けるためにタイムリープしてきた。IBN5100を手に入れ、SERNにあるメールのデータを削除しなければ、まゆりはSERNに、いや世界に殺されるからだ。そして俺は、そのために一つずつメールを削除してきた。一つは鈴羽の尾行をしないこと、一つはフェイリスの父親が事故に遭うのを見過ごすこと、そしてもう一つは、ルカ子の性別を変えないこと。そうして俺は数々の思いを踏みにじって、この世界線にやってきた。そして、次は……」

「学園艦や戦車道誕生のきっかけになった、米軍の輸送任務を取り消すこと……」

倫太郎の言葉に続くように、紅莉栖が言った。倫太郎はその紅莉栖の言葉にコクリと

頷く。

「そうだ。俺は、消さなくてはならないんだ……大切な仲間を、まゆりを救うために……！」

倫太郎は喉から声を絞り出すかのように言った。

その痛々しい様子を見て、紅莉栖はなんとかできないかと考えを巡らせる。

「まって、他に何か方法があるはずよ。そう、エリカの世界線を消さなくても済む方法が——」

「そんなものはない！」

倫太郎が叫んだ。その声に、紅莉栖はビクリと体を震わせる。

「ないって、どうしてそう言い切れて……」

「すでにお前と考え抜いたことだからだ！ お前に何度も話して、何度も一緒に考えて、そして最後に出る結論は、いつも一緒だった……！」

「何度もって、じゃあ、この結論を出すために岡部、あんた……」

「そうだ、俺はすでに何度もタイムリープしている。そして幾度も一緒に見てきたんだ。まゆりが、死ぬ瞬間を……！」

倫太郎の言葉には、重みがあった。それは、その事実を言う度に回避できないまゆりの死を思い出しているからだだった。

そのことは、紅莉栖にもよく伝わってきた。

「……………ごめんなさい」

だから紅莉栖は謝った。軽率な発言をした。そう思ったから。

「……………いや、いいんだ。こんな話を素直に受け止めてもらって、いつもお前には感謝している」

「当然でしょ。仲間じゃない」

「ああ、仲間だ。そして……………エリカも」

「……………」

倫太郎と紅莉栖はそこで押し黙る。

二人の嫌な沈黙が、屋上を支配した。

「……………どうするの、これから」

その沈黙をなんとか紅莉栖が破り、倫太郎に聞く。

「……………どうしたいんだろうな、俺は」

その倫太郎から返ってきたのは、曖昧な答えだった。

「俺は、まゆりを絶対に救うと誓った。そのためにラボメン達の思いも踏みにじってきた。だが、そのラボメンを一人失ってしまうと考えると……………悲しみや恐怖、苦しさが襲ってきて……………どうすることもできなくなってしまった。こうしてお前にこの事実を

話したのも、一種の逃げだ。お前に話すことで、この押しつぶされそうな感覚をお前にも押し付けようとする、逃げだ」

「そんなことない！」

倫太郎の言葉に、紅莉栖は憤った。

「さつきも言った通り、岡部にとつての仲間は私にとつての仲間でもあるわ。その仲間が消えてしまう問題なんて、一人で抱え込まれたほうが嫌よ！ だからあんたが話してくれて、変な話だけどその、少し嬉しい」

「……ありがとう、紅莉栖」

「っ!? 今、紅莉栖って……て、そんなこと言ってる場合じゃないわね。とにかく、いろいろ試してみましよう。まだ何か私達の気づいていない道があるかもしれない。とにかく、時間がある限り悪あがきを——」

「その必要はないわ」

と、そのときだった。

突如声がし、屋上の扉が開かれたかと思うと、そこから一人の少女が現れた。それこそ、先程までずっと扉の向こうで話を聞いていたエリカだった。

「エリカ!?!」

倫太郎が驚きの声を上げる。

紅莉栖もまた、驚愕の色を隠そうとはしなかった。

対して、エリカは泰然としていた。そして、そのままエリカは腰に手をあてながら言う。

「話は全部聞かせてもらったわ。結論なんて出てるじゃない。消しなさい、私の世界線」  
「なっ……!!?」

エリカがさも当然かのように言う。それに対し、倫太郎達は驚愕のあまり言葉を失った。

さらにエリカは続ける。

「もともと私の世界線なんてあなたたちの世界線からすれば存在しなかった世界線なんだし、消えても問題ないでしょう？ あなた達が気にすることじゃないわ。すべてが元に戻るだけ。別に悩む必要なんてないじゃない」

「馬鹿を言うなっ!」

平然とした顔で言うエリカに対し、倫太郎は激昂した。

そしてそのままエリカに近づくと、彼女の肩を両手で掴み、そのままエリカに言う。  
「お前という個人が消えてしまうんだぞ?! それだけじゃない! お前の過ごしてきた学校も、友人達も! お前がこの世界にいたという痕跡がすべて消えてしまうんだぞ!」

「……分かってるわよ。それぐらい」

「分かってない！ 分かってたらそんな簡単に——」

「分かってるって言うてるでしょ！」

今度はエリカが激昂した。怒りの顔を倫太郎に見せ、掴みかかっている倫太郎の手を振り払った。

倫太郎と紅莉栖は驚く。一方、エリカの顔は歪んでいた。悲しみや、怒りや辛さが入り混じった、複雑な表情だった。

「分かっているのよ！ もし倫太郎達がDメールを打ち消したら、すべてが、私が消えちゃうことぐらい！ 何もかもがなかったことになっちゃうことぐらい、分かっているのよつ！」

エリカは目を涙ぐませながら叫んだ。その剣幕に、倫太郎達は言葉を紡ぐことができない。

対して、エリカはさらに続ける。

「私だって、本当は嫌よ！ 消えるのなんて！ 私だけじゃなく、隊長やみほまで消しちゃうなんて考えると、怖いし嫌よ！ でも、でも……！」

そしてエリカは、絞り出すかのように言った。

「それでも！ 大切な仲間が！ まゆりが！ 死んじやうなんて考えると私、もつと耐

えられないの……！」

「エリカ……」

倫太郎はそのエリカの言葉に、彼女の名を口にするこゝろしかできなかった。

エリカはそこで荒々しかった言葉と態度を収め、今度は意気消沈したような様子で語りだす。

「……嫌に決まつてるじゃない。自分が、尊敬する人達がなかったことになつちやうなんて……。でも、元々私達はここには存在しなかつた存在。そう考えると、納得もできるわ。でも、まゆりは違う。まゆりは元々この世界線で生きていて、これからも生きるはずだった。それが、理不尽に命を奪われるなんて、あつてはいけないことよ。それに何より、まゆりに死んでほしくないって思う、私がいるの……」

「……あなた、そこまで……」

紅莉栖が静かにエリカの言葉に反応する。

エリカの表情は、とても暗かつた。しかし、絶望とはまた違ったものだった。それは、ある種の覚悟を決めた、そういう顔だった。

その顔で、エリカは言う。

「だから倫太郎、私の世界線を消して。そして約束して。まゆりを必ず救うつて。何があつても、絶対にまゆりを、いいえ、まゆりだけじゃない。ラボメンみんなを救うつて」



それはエリカの決意だった。

自分を犠牲にみんなを助けようとする、エリカの決意だった。

その決意は、倫太郎にも、紅莉栖にも確かに伝わってきた。

「しかし、そのラボメンには、お前も含まれているんだぞ、エリカ……！」

倫太郎はエリカに言う。

確かに倫太郎は、エリカの決意を受け取った。だが、それでもやはり、エリカのことを見捨てたくないという気持ちだが、倫太郎の中でせめぎ合っていた。

「……本当に優しいのね。あなたは」

エリカは倫太郎にそう言っつて、儂げな笑みを見せる。そして、ふとエリカは倫太郎に近づくと、そつと倫太郎の体を両腕で抱きしめた。

「っ!? エリカ……!?!」

「大丈夫、私が消えても、倫太郎、あなたが覚えていてくれさえすれば、私はずっとラボメンだから。ずつと、未来ガジェット研究所の一員だから。だからこの感触を忘れないで倫太郎。私の魂は、世界線が消えても、あなたと共にあるわ」

「……エリカ……！」

倫太郎は腹の底から絞り出すようにエリカの名前を口にする。

エリカはそこで倫太郎から手を離し、今度は紅莉栖の元へと向かった。

「……紅莉栖」

「……エリカ」

エリカと紅莉栖は互いに見つめ合う。

「……不思議ね、二週間にも満たないような付き合いだったのに、あなたと分かれるのがこんなにつらいだなんて。それに、あなたは忘れてしまう。リーディングシユタイナーを持つ倫太郎とは違って、あなたは世界線が移動したら私のことは忘れてしまうのよね。それが、少し悲しいわ」

「……エリカ……私だって、忘れてたくないわよ。大切なラボメンのこと、仲間のことを忘れるだなんて、そんなの嫌よ……！」

紅莉栖が瞳に涙を見せる。その紅莉栖に、エリカは近づいて、瞳からこぼれ落ちようとしていた涙を指ですくった。

「泣かないの、あなたらしくないわよ、クソコテの紅莉栖。大丈夫、私達の間まで、倫太郎が私達のことを覚えていてくれるから。だからきつと、なかつたことになつても、なかつたことにはならない。そうでしょう？」

「……ええ、そうね。そうよね……！」

そうして、エリカと紅莉栖は抱き合った。例え消えてしまおうとしても、お互いのことを、忘れたくない。そういう思いを込めて二人は抱き合った。

どれくらい抱き合っただろうか、二人はやがて離れ、見つめ合う。その顔は、互いに微笑んでいた。

そして、離れた後エリカは屋上の奥へと歩いていく。そして、月を背にして二人に言った。

「ありがとう、倫太郎。紅莉栖。私、あなた達のラボメンになれて、本当によかった」

それは、エリカの心からの笑顔での言葉だった。

その言葉に、倫太郎と紅莉栖も答える。

「ああ、俺もだ！ お前と会えて、本当によかった！」

「私もよ！ 私もあんたと知り合えて、良かったと思ってる！」

それが最後の言葉だった。

その言葉を最後に、エリカは頷くと屋上の柵に手を乗せて、空を見上げた。

それが合図であることは、倫太郎も紅莉栖も分かった。

二人は屋上から降りると、ラボに向かった。そしてラボで準備を始める。Dメールを送る準備だ。

「ん？ どしたのオカリンに牧瀬氏。電話レンジの準備始めてさ」

「ああ、ちよつとした実験だ。大丈夫だ、すぐに終わる」

至の言葉に、あえて至のほうは向かずに答える倫太郎。

そんな倫太郎の後ろ姿を見て、まゆりが倫太郎に近づくと。

「大丈夫？ オカリン」

そして、倫太郎に心配そうに言った。

「まゆり？」

「オカリン、なんだかとても辛そうなのです。まゆしいはとっても心配なのです」

「……ああ、大丈夫だよ。大丈夫だ、まゆり」

「……オカリン」

倫太郎はまゆりの頭を撫でながら言う。まゆりはなおも倫太郎のことが心配であったが、倫太郎にそう言われては納得するしかなかった。

「……岡部、準備できたわよ」

「ああ……やるぞー！」

それとほぼ同じ頃。エリカは空を見上げながら電話をかけていた。その電話は、数コールした後には相手が出た。

『はい、もしもし。……エリカ、さん？』

「ええ、そうよみほ。久しぶりね」

相手は隊長であるまほの妹、西住みほだった。かつてエリカの元から離れた、かつて

の戦友であり、友人だ。

『どうしたのエリカさん？ 急に電話だなんて』

「いいえ、あなたの声が聞きたいなと思って。それと、言いたいこともあったから」

『言いたいこと？』

「ええ。……ごめんなさい。以前は辛くあたってしまった。あなたが別の学校で楽しそうにやってるのを見て、ついカツとなつて……でも、本当に悪かったと思ってる。ごめんなさい」

『ええ!? べ、別に気にしてないから大丈夫だよ！ それに、私も悪いしエリカさんが怒るのも無理ないよ……。そのことを言うために、わざわざ電話を？』

「ええそうよ。ごめんなさい、唐突な電話で」

『ううん、いいよ別に！ そうだ！ 今度一緒に遊ぼうよ！ 仲直りの証、つていうとなんか変かもしれないけど、とにかくそういうことで……』

「……ええ、そうね。今度一緒に遊びましょう。きつと」

『よかったあ！ 私、ずっとエリカさんと仲直りしたいと思ってたんだ！ だから、嬉しい！』

「……うん、私も嬉しいわよ。みほ。最後にあなたと、仲直りできて」

『え？ 最後つて……』

そのときだった。建物が、軽く揺れ始めた。

「さよなら、みほ」

「それでは、Dメールを送信するっ……！」

倫太郎は目をぎゅつと瞑りながら、メールの送信ボタンを押す。メールの内容は『……、——、——、——』モールス信号でSTOPを意味する。

「うっ……！」

倫太郎がメールを送った瞬間、倫太郎の視界は歪み、頭痛がし、足元がおぼつかなくなる。

リーディングシュタイナーが発動したのだ。

次の瞬間、倫太郎はラボの真ん中に立っていた。ソファーにはまゆりが、パソコンの前には紅莉栖が、電話レンジの横のパソコンの前には至が座っている。

「……なあ、みんな」

そこで、倫太郎は静かな声で全員に話しかける。

「ん？ どうしたの岡部？」

「……逸見エリカという少女のことを、知っているか」

倫太郎はエリカのことを全員に聞く。その返答は——

「え？ 誰？」

「んーまゆしいは知らないなあ」

「僕も知らないお。誰それエロゲのキャラ？」

誰も、エリカのことを覚えていなかった。

「……そうか。いや、なんでもない。すまなかった」

こうして、倫太郎はまた一つDメールを打ち消した。エリカを犠牲にし、また一步元の世界線へと近づいたのだった。

そこからも倫太郎の戦いは続いた。

萌芽の送ったDメールを打ち消し、最初に送ったDメール、『牧瀬紅莉栖が刺された』を打ち消し、紅莉栖を一旦殺してしまい。それでも歩んできた中で、未来から来た鈴羽に第三次世界大戦を止めるために紅莉栖を助けて欲しいと頼まれ、そしてその過程で一度は失敗しながらもタイムトラベルを行い紅莉栖を助け、未来の倫太郎が示したシユタインズ・ゲート世界線へとたどり着いた。

その世界線でも倫太郎は一度消えかかるが、今度は紅莉栖が倫太郎を助けるためにタイムトラベルをし倫太郎を助けた。

こうして、倫太郎と紅莉栖、ラボメン達は平和な世界線、シユタインズ・ゲート世界

線を手に入れたのであった。

そして、始まりの夏から一年が経ったある日だった。

「……岡部」

紅莉栖は、屋上で仰向けに寝て空を仰いでいる倫太郎に声をかけた。

「ん？　なんだ紅莉栖か。どうした」

「どうした、じゃないわよ。何一人でぼーっとしてんのよ」

「……いや、少しな」

「……もしかして、いつだか言ってた逸見エリカって子のこと考えてるの？」

紅莉栖は倫太郎の横に座りながら言う。倫太郎はその紅莉栖に、「ああ」と一言返す。「前にも言った通り、俺か数々の世界線を渡つてこの世界線にたどり着いた。その過程で、沢山のラボメン達の願いをふいにしてきた。その中でも、エリカのこととは今でも思いつくはずだ」

「私がリーディングシユタイナーに目覚めたのはあんたを助けに行く過程だったから覚えてないけど、あんたはしっかりと覚えているのよね。そのエリカって子の事」

「ああ、それがエリカとの約束だからな」

倫太郎は寝そべっていた状態からゆっくりと起き上がり、紅莉栖と共に並んで座つ



た。

「俺は忘れないと誓った。エリカというラボメンのことを。大切な仲間のことを。だから時折こうして思い出すんだ。ラボには大切な、九人目の仲間がいたことを」

「……私はその子のことを覚えていない。でも、あんたが覚えているなら、私はあんたが思い出す手伝いをする。具体的に何を করতেわけでもないけど、あんたが一人で寂しいときは、あんたの隣りにいるわ」

「紅莉栖……」

「岡部……」

紅莉栖が倫太郎の肩に頭を乗せる。

倫太郎も、そつと紅莉栖と抱き寄せる。

二人だけの静寂の時間が流れていた。

そんなときだった。

突然、急な閃光が屋上で瞬いた。

「んあっ!?!」

「きゃっ!?!」

二人は目を手で隠しながら顔をそむける。

そして、光が収まったかと思うと、そこにはとんでもないものがあつた。

「……何、これ？ 戦車!？」

「……これは、シュトルムティーガー!？」

そこにあつたのは、第二次大戦のときにナチスドイツが作った自走砲、シュトルムティーガーだった。

全長六メートルはあろうかという巨体はその屋上に突然現れたのだ。

二人は混乱しかなかった。

「これは、一体……」

倫太郎が恐る恐る戦車に近づく。

と、そのとき戦車のハッチが開き、一人の人影が出てきた。

それは女性だった。

白衣に身を包み、長い銀髪の後ろ髪をポニーテールにしてまとめている。その姿に、

倫太郎は見覚えがあつた。

「ふう……! ちゃんといついたみたいね」

「お前は……まさか……お前は……!」

「久しぶり、倫太郎。そしてこちらでははじめまして、紅莉栖。二人共、私と一緒に来て。

世界の消滅を防ぐために!」

そこにいたのは、倫太郎達よりも年を重ねた姿をした、逸見エリカだった。

## 第6話

「エリカ、どうして……!?!」

倫太郎は驚きを隠せなかった。

世界線ごと消してしまったと思っていた女性が今こうして成長した姿を見せて倫太郎達の前に現れたのである。それも当然であった。

「驚くのも無理はないわね。確かに私はあなたの前から一度消えたもの。でも安心して。私は正真正銘の、逸見エリカよ」

エリカは以前よりも豊満になっている胸に手を当てて言う。

そのエリカに驚いているのは倫太郎だけではなかった。紅莉栖もまた、驚きの色を表していた。

「え!?! 一体、一体どういうこと!?! あなたは……」

「ああ、さつきも言ったけどこつちでははじめましてね、紅莉栖。私は逸見エリカ、倫太郎から話は聞いてないかしら?」

「あなたが逸見さん!?! 話に聞く分には私よりも年下だと聞いていたんだけど……」

「ええ、確かに私はあなたよりも年下だったわ。でも今は別。私が来た世界線では、もう

二十六年もの時間が流れているもの」

「二十六年!? ということは、お前は、二〇三六年の未来から来たということか!」

「二応、そういうことになるわね。でも安心して。この世界線とは直接関係ないから」

エリカは二人の前に片手を突き出して言う。だが、それが余計倫太郎達を困惑させた。

「この世界線とは直接関係ない……? 一体どういうことなんだ……」

「ええ、私も混乱してよく分からないわ。まずどういうことなのか、説明して欲しいわね」

二人のその言葉に、エリカは頷く。

「その感想はもつともね。それじゃあ、順を追って説明していくから、二人共よく聞いてね」

エリカそういいながら腕を組む。そうして、エリカは倫太郎達に説明を始めた。

「まず説明しなければいけないのは、あなた達の世界線とは別に私の世界線が存在しているということ。それぞれ異なった世界線が同時に存在しているの。わかりやすく言えば、平行世界ね」

「平行世界!?! そんなものが本当に存在するなんて……!?!」

「でも否定はできない。あなたならそう言うでしょ?」

衝撃を受ける紅莉栖にエリカが言う。一方、倫太郎は蒼白な顔をしていた。

「待ってくれ。もし平行世界が存在しているというのなら、俺がこの世界線にたどり着くために今までなかったことにしてきた世界線は……」

倫太郎の懸念はそこにあつた。もし今までなかったことにしてきた世界線が存在するのなら、その分苦しんだり悲しんだりするものがでてきたり、無駄になつてしまふ努力が出てくることになる。

だが、エリカは倫太郎の言葉に静かに頭を振る。

「大丈夫よ倫太郎。少なくとも私達の研究では、確固として存在する世界線は観測者が存在しかつダイバー・ジェンスレーターで換算して十パーセント以上離れているか、極めて近くに隣接しているかの二つに分かれていて、そしてなおかつ隣接する世界線は大抵が何も存在しない無の世界線なの」

「っ…………… R 世界線……………」

紅莉栖がはつとしたように言う。エリカはそれに意外そうな顔をする。

「あら、その存在を知っているのね。なら話は早いわ。とにかく、倫太郎の心配しているようなことはないから安心しなさい。私達は便宜上、根幹となる世界線を『世界像』と呼んでいるわ」

「世界像…………… ハイデッガーね」

「ええ。そして本題はここからよ」

エリカが腕を組みながらもピンと指を立てる。

「本来私達の世界線とこの世界線はさつきも言ったようにダイバージェンスメーターが十パーセント以上離れた世界線だった。でも、恐らくDメールによる度重なる世界線の移動で世界線に大きなブレが生じたのか、本来交わることのない世界線が混じり合ってしまったの。それが私の世界線と、この世界線の混線。そしてその結果、世界線が不自然に絡み合い、このままいけば互いの世界線が消滅してしまう危険があるの。極めて離れた二本のロープを無理矢理絡ませて、それが引つ張りあつて千切れそうになつてる状況を想像してもらえればだいたい合つてるわ」

「世界線が消滅……!?!? そんな、大変じゃないの!」

「ええそうなの。このままでは大変なのよ。だから、あなた達に来てほしいの。私の世界線に来て、世界線分離装置を完成させるために」

驚嘆する紅莉栖の言葉にエリカは頷き、そして組んだ腕を解いて倫太郎達を見据えて言った。

そしてさらに紅莉栖はエリカの説明から湧いた疑問を口にする。

「世界線分離装置ですって?」

「ええそうよ紅莉栖。その名の通り、不自然に絡み合つた世界線を分離するの」

「そのために、俺達が必要なのか？」

倫太郎の問いに、エリカはコクリと頷いた。

「そうよ。私達のほうで世界像移動装置は完成させた。それがこの戦車。でも、世界線分離装置だけはあなた達の協力が必要な。複数の世界線を観てきた倫太郎と、脳科学の天才である紅莉栖の知識が。お願い、どうか私に力を借して」

エリカは真剣な目つきで倫太郎とエリカを見た。その視線からは、エリカの思いが伝わってくるように、倫太郎には思えた。

そして、倫太郎は一旦目を瞑ると、カッと目を開き、勢いよく独特なポーズを取った。

「……よおし！ よかろう！ シルバーファングよ！ この狂気のマッドサイエンティスト鳳凰院凶真が、世界の関連構造を破壊するその恐ろしき発明の手助けをしよう！ 感謝するがよい！ フウーハツハツハハハハハ！」

「……ふふっ」

高らかに笑う倫太郎を、紅莉栖はじつとりとした目で見る。一方のエリカは、一瞬驚いたがその後とても嬉しそうな顔をした。

「……なんだ紅莉栖、その目は」

「……いいえ、あんたらしいと思っただけよ」

「そうね、私からしたら久しぶりだけど、本当に倫太郎らしくて安心したわ」

紅莉栖の言葉にエリカが同意する。そのエリカの表情は、笑っていた。

「でも、ありがとう倫太郎。こんな無茶な提案を同意してくれて」

「当然だ。お前は大切な仲間だ。その仲間の頼みを断るはずがないだろう」

「倫太郎……」

エリカの眩きからは嬉しさが滲み出していた。倫太郎は、そんなエリカに対し笑いかける。

その様子を見て、紅莉栖もまた腕を組みながら笑った。

「ま、世界の危機らしいしね。私も当然手伝うわよ。それに、岡部一人にしたら何するかわからないし」

「俺はいたずらっ子か何かか!?!」

「ありがとう紅莉栖。……ふふっ、それにしても本当に懐かしいわね、このやり取り」

エリカは口元に指を当てながら笑う。その笑みは、言葉通り倫太郎と紅莉栖のやり取りを心から懐かしんでいるようだった。

「さ、そうと決まったらさっそく乗り込んで頂戴。大丈夫、狭いように見えて中は広いから」

そう言ってエリカは戦車もとい世界像移動装置の上へと登る。



そして、二人が登りやすいように上から手を差し伸べる。

倫太郎と紅莉栖は、その手に掴まり世界像移動装置の上に乗る、そしてそのままエリカに続いてハッチを開けてその中に入った。

「おお……本当に中は意外と広いな」

倫太郎が素直な感想を述べる。エリカはその言葉に「フフン」と鼻を鳴らし、胸を張る。

「まあね。戦車なのは見た目だけだし。中はちゃんと世界線分離装置としての構造を取ってるのよ？」

「らしいわね……色々興味深い中身だわ」

紅莉栖が中を見回しながら言う。そうやって見回しながらも、倫太郎と紅莉栖は世界像移動装置の中の座席に座り、エリカが運転席につく。

「それじゃあ稼働させるわよ。しっかりベルトをして、掴まっててね！」

「うおっ！」

「きゃっ！」

言われた通りベルトをした二人は急な振動に驚く。その振動と共に、世界像移動装置は屋上から消えた。

その中では、倫太郎と紅莉栖が向かい合って座っており、その二人の横の奥の操縦席

にエリカが座っている。

完全に作動を確認したエリカは、椅子を回し二人に向き直った。

「ただいま世界像移動装置は順調に移動中よ。少し時間がかかるから、軽く話でもしましょう？」

エリカが軽く笑って提案する。その提案を、倫太郎と紅莉栖は軽く頷いて受け入れる。

「そうね。じゃあ最初に聞きたいんだけど、なんで見た目を戦車にしたの？ 外見もそれらしい外見でいいじゃない？」

「ああ、もつともな質問ね。それはね……」

エリカはもったいつけるように溜める。その溜めに、倫太郎と紅莉栖は息を呑む。

そして、エリカは言った。

「私の趣味よ！」

その言葉に、倫太郎と紅莉栖は座りながらずっこけた。

「趣味ってお前……」

「あら、色々変な未来ガジェットを作ってきた倫太郎に言われたくないわね」

「変とはなんだ！ 未来ガジェットは我がラボの大切な発明だぞ！」

「でも趣味に走ってる部分があるのは事実でしょ？ これもそれと同じ。まあ一応戦車

道用の戦車っていう偽装も兼ねてはいるんだけど、だいたいは趣味ね。というか、私はこれを未来ガジェットのものつもりで作ったんだから」

「未来ガジエツトのものつもりで？」

倫太郎が聞き直す。エリカはそれに「もちろん」と答えた。

「私だってラボの一員ですもの。未来ガジエツトを作ったついでいいでしょ？」

「……ああ、そうだな。何も問題はない」

倫太郎が軽く笑いながら答える。それは、エリカが未だに自分のラボの一員でいてくれる嬉しさがあつたからだつた。

「よかつた。実は向こうでの研究所を勝手に未来ガジエツト研究所支部なんて名乗らせてもらつてるけど、別にいいわよね！」

「なっ………！ ま、まあ、別に咎めはしないが……」

そのエリカの楽しそうな発言に、倫太郎は少し言い淀んだが、事前に問題ないと言つた手前、否定することはせずにエリカの言葉を肯定した。

「ふふっ、良かつた」

「あらら」

その倫太郎の肯定にエリカは嬉しそうな顔をし、紅莉栖は呆れ顔をする。

その紅莉栖の呆れ顔に倫太郎はたらりと一筋汗をかく。

「と、ところで！」

そこで倫太郎は話を変えることにした。

それはそのままだとどうもバツが悪いというものもあったが、どうしても聞いておきたいことがあったからでもあった。

「お前は過去の世界線、つまり俺達と一緒に過ごしてきた時間を覚えているようだが、それはつまり……」

倫太郎は一つ思う所があった。それはエリカにも伝わったようで、エリカは頭を縦に振る。

「ええ、私も目覚めたの。リーディングシュタイナーに」

「やはり、か……」

倫太郎の考えは当たっていた。紅莉栖もまた、分かっていたように頷く。

エリカは話を続ける。

「あなたが米軍の作戦を打ち消すDメールを送ったことにより、私は元の世界線に戻った。そのとき、私は目覚めたの。すでにリーディングシュタイナーを持っていたあなたの側にいたからか、それとも単なる偶然かは分からない。でも私はリーディングシュタイナーに目覚めた。それを私は運命だと思った。倫太郎風に言わせてもらえば『シュタイNZ・ゲートの選択』ってやつね。だから私は、物理の道を取って、多くの人

の協力を得ながら、世界像移動装置を開発したの」

「そうなのか……しかし、どうしてまた、世界像移動装置を作ろうと……」

「それは……あ、そろそろ着くみたいね」

エリカが振り向き運転席にある画面を見ながら言う。そして、その瞬間だった。

「うっ……!」

紅莉栖が急に頭を抱え苦痛の声を上げたのだ。

「紅莉栖?!」

「紅莉栖!」

倫太郎が驚きベルトを外して立ち上がろうとする。エリカも驚き彼女の顔を見た。

だが、それを紅莉栖が手を突き出して止めた。

「ま、待って岡部! 大丈夫、大丈夫だから……!」

「大丈夫ってお前、どう見てもそういう風には……」

「うっ……! いいから待って……! ……これは、この記憶は……。エ、エリカ……」

「?」

紅莉栖は、片手で頭を抱えながらもエリカの顔を見ると、彼女の名を口にした。

「っ!?! 紅莉栖、今私の名前……!?!」

「……思い、出したわ……! ああなたの、事……!」

紅莉栖が未だに辛そうな顔をしながらも笑ってエリカに言った。

倫太郎は何が起きたか分からなかった。だが、一方でエリカは何が起こったのかを瞬時に理解したようで、「……なるほど」と小さく呟いた。

「そう、そういうことね……」

「おい、一人で納得していないで俺にも何が起こったのか説明してくれ」

「ああ、ごめんなさい。世界像移動装置にリーディングシユタイナー持ちが乗ると、他の世界線の記憶が流れ込んでくる可能性があるの。私も最初に実験したときは別の世界線の記憶が流れ込んできて、結構大変だったわ。紅莉栖にも同じ現象が起きてるんだと思う。紅莉栖、あなたリーディングシユタイナーをいつの間にか発現させたのね……」

「……ええ、ちよつと岡部絡みで色々あってね」

「そうなのか。俺には流れ込んできていないが」

「倫太郎は様々な世界線を観てきたからでしょうね。すでに記憶として持っているものを再びインプットされることはないから」

紅莉栖は大分頭の痛みが引いたのか、頭から手を離し顔も落ち着いたものになる。

そして、エリカを見て嬉しそうな顔をする。

「エリカ！ 思い出せてよかったわ……！ こうしてあなたとまた会えるなんて、驚き

ねー」

「ありがとう紅莉栖。私もあなたが記憶を取り戻してくれて、こうして話せることは嬉しいわ。あらためて久しぶり、紅莉栖」

「ええ、久しぶり、エリカ。……そして、岡部」

紅莉栖はエリカと笑顔で話した後、倫太郎の方に真面目な顔で向き直った。

「あんたが複数の世界線を越えて苦労してきた気持ち、少しでも思い出したことでも分かった気がする。……今更だけど、本当に頑張ったのね、あんた」

「……ああ、ありがとう。紅莉栖」

倫太郎と紅莉栖は言葉を交わして見つめ合う。

そんなとき、世界像移動装置はガコンと大きく揺れた。

「おわっ!？」

「きゃあっ!？」

不意の揺れに、倫太郎と紅莉栖は驚く。一方、エリカは平然としていた。

「さあ、着いたわよ。二人共、外に出るわよ」

そう言ったエリカはすばやくベルトを解き、ハッチを開けて外に出る。それに、倫太郎と紅莉栖も続く。

三人が外に出ると、どうやらそこは倉庫のようだった。

明かりで照らされた倉庫ではあったが、地下にあるのか窓がなく外からの明かりはな  
いたため人工の光だけの薄暗さを倫太郎は感じた。

周りを見回すと、様々な機材が置かれており、どうやらここで世界像移動装置が開発  
されたのが分かった。

一足早く床に降りたエリカが手を差し伸べたため、紅莉栖はそれに掴まり、倫太郎は  
一人で降りる。

そのときに、コツンと床に音が響き渡った。

「ようこそ。私の世界線、未来ガジェット研究所城南大学支部、地下開発室へ」

エリカはぱつと片手を広げて言う。

広々とした地下を見て、倫太郎と紅莉栖は口を開ける。

「おお……うちのラボよりずっと広いわね、支部なのに」

「うぐぐ……おのれシルバーファンクよ！ ラボメンの一人の分際で本部より大きな研  
究所を持つとは小生意気な！」

「別にいいでしょ。それに、上にある研究室はそこまで大きくないから安心しなさい」

そう言いながらエリカは歩き出す。二人はそれについていく。

エリカが階段を上り扉を開けると、外の光が二人の目に入ってきた。

外の太陽の光は強烈で、二人は少し目が眩む。



そして目が慣れて見てみると、そこには広大なキャンパスが広がっていた。

「あつ、エリカ!」

と、そこで地下から出てきたエリカを迎える四人の女性がいた。その女性達は皆様に同じ色のつなぎを着ていた。

「もしかして、その人達が?」

「ええ、そうよ。紹介するわ。彼が岡部倫太郎、そして彼女が牧瀬紅莉栖。倫太郎、紅莉栖、紹介するわ。彼女達は世界像移動装置開発を手伝ってくれた城南レーシングチームのみんなよ」

「ナカジマです、よろしくー」

「スズキです、どうもー」

「ホシノだ、よろしく」

「ツチャです、どもどもー」

「ん、どうも……って、レーシングチームが世界像移動装置の開発に携わっているのか!?!」

倫太郎は驚嘆する。その分野はエリカの研究しているであろう分野とは大きくかけ離れていると思ったからだ。

「ま、そりゃ驚くわよね。でも彼女達、機械のことになるとものすごく優秀なの。彼女ら

とは昔戦車道やってた頃に知り合つてこの大学で再会したんだけど、ずっと昔からお世話になつてるのよね」

「いやーお互い持ちつ持たれつでやつてるよー」

「そうだね。速いマシンを作ることに關してはエリカに大分世話になつてるし」

スズキとツチャヤが笑つて言う。倫太郎と紅莉栖は大分驚いているようだった。

「それでどうする？ もしよかつたらキャンパスを案内するけど」

「いや、いい。それよりも早くお前の言う未来ガジェット研究所支部の研究室とやらを見させてくれ」

倫太郎はエリカの提案をあえて受け入れず、すぐさま研究室に行きたいと言つた。

それは、勝手に作られた支部がどんなものなのかを見てみたいと思つたからであつた。

「あらそう。分かつたわ、ついてきて」

エリカは大学の研究棟らしき建物に向かつてキャンパスを横切り始める。

倫太郎と紅莉栖はそれについていく。構内には、多くの学生が歩いており、かなり大きな大学なのが見て取れた。

「なかなかの大学なのね。私のいたアメリカの大学もここまで人は多くなかつたわ」

「そうね。あなた達の世界線と違つて、まず学生の数がとっても多いから。何せ学園艦

で数千人単位で育成されてる子の多くが大学に進学するのよ。そりや多くもなるわつて感じよね」

「なるほどそう言った事情が……」

倫太郎と紅莉栖は納得しながらもエリカと会話を続け、研究所に向かう。

途中、すれ違った学生がエリカに対しみな頭を下げたり「おはようございます教授」と言ったりしたこと、エリカが教授であることが倫太郎達にも理解できた。

研究棟に入ると三人はエレベーターで四階に上がり、廊下をまっすぐ進み途中にある扉の前へと立つ。

扉の横にあるネームプレートに『逸見エリカ』と書かれており、扉にはホワイトボードが吊るされ、そこに『未来ガジェット研究所支部』と書かれていた。

「本当に勝手に支部を名乗っているのだな……」

「そう言ったでしょ。さあ、入って」

苦い顔をする倫太郎を無視し、扉を開けるエリカ。中は大学の研究室としては普通なくらいの広さの部屋だった。

中央に置かれた机にはいろいろと乱雑に機械が置いてあり、壁には鉄の骨組みでできた本棚に何冊もの本が置かれている。

「どう？　これが未来ガジェット研究所支部、またの名を私の研究室よ」

「またの名と呼び名が逆な気がするのだが」

「細かいことは気にしない」

倫太郎のツツコミに笑いながら返す。

一方、紅莉栖は部屋のあちこちを見て回っていた。

「へえ、未来の平行世界だけど、こちらとあまり本や機材は変わらないのね……あ、これは知らない本だわ。なになに、『平行世界論、ロザリンド・ルテス』……」

「ああ、その本ね。それは私が世界像研究をする際にかなりお世話になった本よ。もう百年以上前の学者だけど、かなりの天才でね。もし今生まれていれば、数多くのノーベル賞と共に私よりも早く世界像移動装置を開発していたに違いないわ。いえ、もしかしたらすでに当時で作っていたのかもしれない、そう思わせるぐらいの人の本よ」

「ふむ、興味深いわね……」

「よかつたらこつちにいる間に新しいの取り寄せてあげようかしら？ 学生のためって

言えば簡単に手に入るし」

「いいの!?!」

「ええもちろん、あなたのためですもの」

紅莉栖とエリカは楽しげに話をすすめる。対して倫太郎は、彼もまた部屋を見回り始めていた。

彼の興味は主に部屋の隅に置かれている一見ガラクタに見える山に向けられてきた。

「なあシルバーファンングよ。この山はもしかして……」

「あら気づいた？ そう、それこそが我が支部の未来ガジェットよ」

「ほう……例えばこれは？」

「それは瞬間沸騰ポット。沸騰させすぎて中身が半分以上減っちゃうんだけどね」

「じゃあこれは？」

「それは自動バツティングマシン。どんな速球でも打ち返すように作った自動でバツトを振るマシンよ。ただバツト振るたびにどつかにバツトがすっぽ抜けちゃう危険性があるのが難点」

「……なんだかろくな発明がないな」

「学生にもよく言われるわ。でもあなたには言われたくないわよ」

エリカは苦笑しながら言う。

そうしてしばらくラボを見回った倫太郎と紅莉栖だったが、やがて二人はテーブルの横に置かれたソファアに座り、エリカと向かい合った。

「さて、それじゃああらかたラボ見物も終わったことですし、ここでの頼み事を二人に伝えるわね。まず紅莉栖、あなたにはあなたの脳科学の知識を使って、リーディングシユタイナーの記憶解析装置を作って欲しいの」

「記憶解析装置？」

「ええ。文字通り、記憶を読み取る装置よ。世界像を分離するには、リーディングシユタイナードで観てきた記憶を分析する必要があるの。あなたにはそれを作る手伝いをして欲しい。そして倫太郎、あなたには向こうの数々の世界線の記憶をそれで読み取らせて欲しい。世界像を分離するために、別の世界像の様々なデータが必要だから」

「なるほど……承知した」

「私も分かったわ。開発はどこで行うの？　ここ？　地下？」

エリカの説明を倫太郎と紅莉栖は理解し、了承する。

そして、紅莉栖が場所についての質問をした。

「そうね、設計図というかある程度の仮説はすでにできてるから、まずこの研究室でその確認と訂正をお願い。そして、完全な設計図ができあがったら地下で開発、と言った感じね」

それに対し、エリカが答える。紅莉栖は「分かった」と言いと頷く。

「俺はその間何をすればいい？」

「うーん、待機で」

「待機って！　それでいいのか!？」

倫太郎があまりにも軽く言うエリカに突っ込む。それに対し、エリカは半目を向け

る。

「しようがないでしょ。あなたに頼みたいことは記憶の読み取りだけなんだから。それまではあなたにできること、正直ないの」

「そ、そうか……」

倫太郎は少しうなだれる。何か重要な仕事を与えられるのではないかと、心のどこかで期待していた倫太郎がいた。

「さて、それじゃあさつそくをお願いできるかしら。ああそうそう、宿は近くのホテルを取ってあるから安心してね。お金は私が出すし」

「ええ、分かったわ。それじゃあ資料お願いできる？」

エリカが立ち上がり、彼女の机から資料を取り出す。紅莉栖はそれを受け取り、早速読み始めた。

そうして、エリカと紅莉栖、倫太郎の世界像分離装置の開発が始まった。

まず紅莉栖は渡された資料をじっくりと一日かけて読み、内容を頭に叩き込んだ。

その後、地下でさつそく開発に携わった。エリカと紅莉栖は二人で色々と議論を交わしながらもリーディングシユタイナー読み取り装置の開発を行った。

倫太郎はそれを観ながらも、時折暇を潰すために大学の構内や近くを見て回った。

と言つても、平行世界とは言え学園艦や戦車道以外は殆ど倫太郎達の世界像とは変わ

らないため、未来の技術に驚くことはあっても、わりとすぐ飽きてしまった。そうして一週間程が過ぎた頃だった。

「よし……これで完成よ！」

紅莉栖が満面の笑みで言った。目の前には、パソコンと大きな金属の筒のようなものに繋げられたヘッドセットが金属の机の上に置かれていた。

「おお、これがリーディングシユタイナー読み取り装置か！」

倫太郎が感心した様子で言う。

「……なんだか、タイムリープマシンそっくりだな」

そして、そんな素直な感想も漏らした。

「そりやそうよ。記憶を読み取るんだから似ていておかしくないわ」

紅莉栖が言う。倫太郎は「そんなものか」と口元に手を置く。

「さあ、倫太郎。さっそくあなたの記憶を読み取らせて。一応、私でテストしてあるから失敗して何か脳に影響が出るなんてことはまずないわ」

エリカが倫太郎を促す。

「ああ、分かった」

倫太郎はそれに頷き、ヘッドセットを頭にはめる。

「それじゃあ……いくわよ！」



エリカがパソコンのキーボードに手をかけ、言う。そうして、エリカはパソコンを操作し、エンターボタンを押した。

「ううっ……!?!」

倫太郎は大きな視界のゆらぎ、頭痛、足元のぐらつきを感じる。それはリーディングシユタイナーの発動のときの感覚と一緒であった。

だが、普段のリーディングシユタイナーと違うのは、それがずっと続くことである。

「ぐうっ……!」

倫太郎は吐き気に襲われながらも、なんとかその場に立ち続けた。

そうしてしばらくすると、やっとその感覚がなくなり、不快感が引く。

「お疲れ様、倫太郎」

「……こんな気持ち悪くなるなんて聞いてないぞ」

「あはは、ごめんなさい。リーディングシユタイナーを読み取るから、それと同じ感覚が襲ってくるの、いい忘れてたわ」

「まったく……」

倫太郎は苦い顔をしながらもヘッドセットを外す。

そして倫太郎がヘッドセットを置くと、エリカが少し二人から離れ、二人に頭を下げた。

「ありがとう、倫太郎、紅莉栖。これで世界は救われるわ。あなた達がいなかったらこうはならなかった。本当に感謝してるわ」

エリカのお礼の言葉に、倫太郎と紅莉栖は顔を見合わせる。そして、笑みを浮かべ言う。

「何を言う、ラボメンの頼みだ。それを断ることはできない」

「そうよ。あなたは私達の大切な仲間なんですから。これぐらい当然よ」

「二人共……」

エリカはその言葉にとっても嬉しそうな顔をする。感極まっているのか、今にも涙を流しそうな雰囲気だ。

「……そうだ！ この世界像を離れる前に、よかつたら戦車道の試合を見ていかない？

あなた達の世界像じゃ、まず見れない代物よ」

エリカはそれを隠すかのように、大げさな笑みをしながら提案する。その提案に、倫太郎と紅莉栖は笑顔で大きく頭を縦に振る。

「おお、それはいいな！ せっかくだし見てみたいと思っていたんだ！ 戦車道！」

「ええ、私も思っていたわ。せっかく平行世界に来たんだし、平行世界らしいものを見ておかないとね！」

「よかつた！ 実は明日私の試合があるの。ぜひ見て頂戴！」

「お前のか!? それは楽しみだ」

倫太郎の言葉に更に笑顔になるエリカ。三人はそうして、戦車道の試合の約束をしたのだった。

翌日。倫太郎と紅莉栖はエリカに大学のある町の近くにある観戦場へと連れられた。大きなスクリーンがあり、そこに対戦する各チームの戦車と上空マップが映し出されている。

スクリーンの近くには地面にビニールシートを敷いて座っている客や、観客席に座って見ている人など、多くの人がいた。

倫太郎と紅莉栖はとりあえず観客席に座ることにした。

「凄い人ね……しかもかなり大規模」

「そうだな。しかし町中でやるなんて大丈夫なのか?」

「お二人共、戦車道の観戦は初めてかい?」

と、その二人の隣から声がかけられた。そこには、とても凛々しい女性が座っていた。

「あ、はい……逸見エリカさんの紹介で来て……」

「エリカの!?!」そうか、彼女が言っていたのはあなた達のことだったのか……それは良かった。今回はプロチームと社会人チームのエキシビジョンマッチなんだが実はエリ

力の試合相手は私の妹だね。すごく楽しみにしていたんだ」

紅莉栖の言葉にとても楽しげに答えるその女性。それだけで、その女性がとてもエリカと親しいのが分かった。

「そうなんですか！ それは楽しみですね！ えっと……」

「ああ、申し遅れた。私の名前は西住まほ。どうかよろしく」

そう言つて、まほは紅莉栖と倫太郎の二人と握手をした。

そうしているうちに、試合が始まった。

スクリーンには重厚な戦車が町中を走っているのが見ることができた。それを見るだけで、倫太郎と紅莉栖は感動した。

「すごい……本物の戦車が動くの、初めて見た……」

「うむ……これはなかなかの迫力……」

紅莉栖と倫太郎は息を呑む。さらに、砲撃戦が始まると目を見開いてそれを見た。

「おお、凄い……！ これが実際の砲撃戦か……！」

「ねえこれ大丈夫なの!? 当たった戦車、大丈夫なの!?」

「安心するといい紅莉栖さん。戦車は特殊なカーボンで守られているから安全だよ」

「特殊なカーボン……一体どんなカーボンなの……」

さらに試合が動く。

その途中で倫太郎達が特に驚いたのが、どんどんと建物が破壊されていくことだ。

「な、なあ!?! 建物が平然と破壊されているぞ!?! 大丈夫なのか!?!」

「うおーっ!?! うちの店がーっ!?! やったーこれで新築できるー!?!」

その答えは上の観客席の声から飛んできた。

「だ、大丈夫なようだな……」

そうしてどんどんと試合は佳境に入っていく。お互いの戦車の数はどんどんと減っていき、ついにはエリカが頭を出している戦車と、相手の隊長の車両——まほの妹が頭を出している戦車の一騎打ちとなった。

「……………」

「……………」

倫太郎と紅莉栖はそれを固唾を飲んで見守る。会場全体が、緊迫した雰囲気にも包まれた。

ついにその戦車同士が一对一で戦う。

それぞれの戦車は接近戦で戦い、ついにはお互いにドリフトし隣接する距離で打ち合い、そして——

「エリカが……」

「負けた……」

試合はまほの妹の勝利で終わった。

会場が一斉に沸く。倫太郎と紅莉栖はどっと疲れたように肩から力を抜いた。

「ふう……」

「どうだった。初めての戦車道の試合は」

「ええ、凄かったです！ また見たいと思わせるぐらいに、衝撃的な試合でした！」

「ああ、こんなスポーツがあるのだな……感動した、正直」

紅莉栖と倫太郎がそれぞれ感想をまほに述べる。すると、まほは嬉しそうに笑った。

「そうか、よかった。是非、その感想をエリカにも伝えてやってほしい。お、噂をすれば……」

三人が話していると、黒く煤けたエリカが三人の元に歩いてきていた。横には相手チームの隊長もいる。

「やー負けたわー。ごめんなさいね、倫太郎、紅莉栖、どうせなら勝った姿を見せてあげたかったんだけど」

エリカが笑って頭をかきながら言う。それに対し、二人は頭を振った。

「いいえそんなことないわ！ とても凄い試合だったわよ！」

「ああ、俺も正直見惚れてしまった」

「そう？ なら良かったんだけど。あ、紹介するわね、こちら西住みほ。私の友達で、今

戦った相手の隊長。みほ、紹介するわね、こちらは岡部倫太郎に牧瀬紅莉栖よ」

エリカがみほを紹介する。みほは慌てながら頭を下げる。

「どつ、どうも！ あなた達がいともエリカさんが言つてた倫太郎さんと紅莉栖さんです  
すね！ よろしくお願ひします！」

「ああ、よろしく」

「よろしくお願ひします」

こうして出会つた五人は、その後沢山の話をした。というのも、倫太郎と紅莉栖が試合の後の打ち上げに呼ばれたからである。

主に戦車道の話をするまほと、エリカの話をするみほ。その話を二人はじつくりと聞き、驚いたり、笑つたり、感心したりなどした。エリカもまたその横で笑つたり話を補足したり恥ずかしがつたりした。

そうしていくうちに夜は更け、パーティは解散となり、倫太郎、紅莉栖、エリカは帰路についた。

その途中であつた。

「……星が綺麗ね」

エリカが歩きながら言つた。倫太郎達もまた空を見上げる。

「……ええ」

「そうだな」

空には満天の星空が広がっている。その星空を見ながら、倫太郎は言った。

「別の世界でも、こうして星空は一緒なんだな」

「そうね。この星空を見ながら、私はずっとあなた達のことを今まで考えていた。……私が世界像移動装置を作ったのはね？　最初はあなた達に会いたいからだったのよ」

「俺達に？」

「ええ、どうにかしてもう一度あなた達に会いたかった。そのためにいっぱい勉強をした。そうして、世界消滅の危機を知ったりなんだりして、そんなこんなでついに世界像移動装置を作り上げた。……私はこんなおばさんになっちゃったけどね」

エリカが立ち止まる。

そして、空に手を伸ばし、呟く。

「まゆりがたまにこうしていたけど、今ならその気持ちも分かる気もする。だって、こうして伸ばすと掴めそうなんですもの。でも、掴めない。私にはそれが悔しかった。だから、その気持ちをバネにした。だから、世界像移動装置を作った」

「……俺達を返して、世界を分離したら、あれはどうするつもりなんだ」

「封印するわ」

エリカははつきりと言った。倫太郎も紅莉栖も、そのエリカの回答を予測していたよ



うだった。

「世界像を渡る旅は魅力的よ。でも、それによって何か悪事を働こうとするやつも絶対いる。だから、公表しないで封印する。あれは、永久に大学の地下に壊れた戦車として置いておく」

「そうか……」

倫太郎はただ一言、そう言った。そして、エリカの横に並んで、同じく空を見ながら、言った。

「いいかエリカ。俺達はどんなに離れていても、どんなに時間が経つてもラボメンの間だ。それだけは、忘れないし、忘れるな」

「倫太郎……」

「そうよ。私も忘れないわ。逸見エリカなんてクソコテが、私の大切な仲間だったことをね。もちろん、あなたも忘れないですよ？」

「……当然よ！ 私だって、あんたみたいなクソコテ、忘れるもんですか！」

そうして三人は誓いあった。決して忘れないと。一生、ラボメンであり続けると。

そう誓いあって、エリカは倫太郎と紅莉栖を元の世界像に返し、世界を分離させた。



「ねえオカリン、牧瀬氏」

いつかの日。とある場所で。

至は二人に聞いた。

「なんだダルよ」

「このラボメンバッチのイニシャルのIって誰ぞ？ 欠番になってる〇〇九番と関係あるん？」

「それは大切な仲間の名前だ。言えるのは、それだけだ」

「ええ、決して忘れない、大切な仲間のね」

「なんだよー気になるじゃんかよー。教えてくれよー」

「ふふっ、いつかお前も思い出すといいな」

「そうね、いつか、きつと」

二人は星空を見ながら、そう言った。



「ねえ、エリカさん」

いつかの日。いつかの場所で。

みほはエリカに聞いた。

「結局、あの人達はどこから来て、どんな人達だったの？ エリカさんはいつつも、大切な仲間としか言わないけど」

「それはね……」

「それは？」

「秘密」

「ええっ!? ひどいよエリカさんー!」

「ふふっ、でも、一つだけ言えることがあるわ。これはね、シユタインズ・ゲートの選択なのよ」

「シユタ……何?」

「くすっ、何かしら」

異なる世界線、交わることのなかった世界で出会った三人。

その三人が再びめぐりあうことはないかもしれない。しかし、三人が固い絆で結ばれていることは、確かな事実である……。